

---

# 聖者の灰

スピカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖者の灰

### 【Nコード】

N0874T

### 【作者名】

スピカ

### 【あらすじ】

心に葛藤を持つ精神科医と、心を亡くした少女と、心を学ぶ為に作られたロボットの物語。

元精神科医の主人公は、偶然訪れた教会でロボットと出逢う。そしてその教会に逃げ込んできた少女。数奇な縁で始まる3人の生活のなかで、3人は心を学び、愛を知る。

## 1・惨禍を欲する耳

「聖者の灰」

### 1・惨禍を欲する耳

秋の夜。いや、暁だろうか。虫の音と共にチリチリと音がする。音に釣られて薄っすらと目を開けると、窓の外が異様に明るいのに気が付いた。赤からオレンジ、オレンジから赤へと揺らめいている明かり。

少しだけ開いている窓からは、季節外れの燃えるような風が忍び込んできている。私は浴衣の胸元に薄っすらと汗が浮かんでいるのに気が付いた。

「・・・何、よお？」

私はゆっくりと起き上がり、窓辺に歩み寄った。

窓の外には大勢の人が旅館を取り囲んでいた。その先頭には銀色の耐熱服を着た消防隊の人が立っている。

「・・・火事！」

一瞬にして目を見開かされた私は、窓の外が紅蓮の炎に包まれているのに気が付いた。

消防隊の人が口元に両手を当て、何かを叫んでいる。私は動揺しながらも耳に意識を集中させた。

「落ち着けえ、落ち着くんだあ」

(そうよ、落ち着きなさい。落ち着いて自分をコントロールするの。できるでしょ?)

胸の中に自分の声が響いた。「自分をコントロール」その言葉に、私は激しい嫌悪感を抱いた。

「・・・こんな時に！」

しかし、その嫌悪感恐怖心を塗り潰し、硬くなっていた体を脱力させた。

「とにかく今は、」

私は頭を振り、深い溜め息をついた。そして、自分の心の中にあるブラックボックスに手を触れた。

（名前は？）

「綾生子あやなす織しき」

（年齢は？）

「31歳」

あ、違うか。一昨日32になったんだっけ。

「ふう・・・気が付けば32年かあ。若いとは言えないよねえ」

（趣味は？）

「読書、それから絵本収集。あとは嗜む程度だけど、コントラバス」

（ここは何処？）

「・・・何処だっけ？名前も知らない町。電車の窓から見えた紅葉が綺麗で、何となく降りたんだよね」

（今居る場所は？）

「その町の旅館。今火事だけど」

（今何をしている？）

「私は今、」

自分の質問に答えようとしていると、ドタバタと激しい足音に声を遮られた。その足音はだんだんと近づいて来て、私の部屋の前まで来た。勢いよく襖が開けられると同時に、消防隊の人が声を上げた。

「大丈夫、」

勢いよく放たれた言葉は、

「・・・そうですね」

私の姿を見たせいか、萎んでいった。

「大丈夫ですよ。火傷は勿論、掠り傷一つありませんよ」

私は皮を剥き終わったミカンを頬張りながらそう伝えた。

「あの、火は消えましたので、ご安心を」  
「ご苦労様」

酸味の強いミカンは暑い部屋に良く合う。そう思った、秋の夜明けだった。

「昨晚はご迷惑をお掛けしました」

「いえ、でも驚きました」

寝不足の私は欠伸を噛み潰し、瞬きを何度もしながら仲居さんに答えた。

「ところで、火事の原因って何だったんですか？」

私がそう聞くと、仲居さんは少し顔を曇らせた。不安、恐怖、それからお客さんへの申し訳なさが宿っているように見える。

「それが・・・放火らしいんです」

「放火？」

仲居さんは胸元に手を当て、不安を押し込めるように答えた。

「はい。ここ最近多いんです。町外れのゴミ置き場が燃やされたり、民家の納屋が燃やされたり、一軒家だったり」

放火は段々と対象が大きくなってきているようだ。同一人物の犯行。

エスカレート？ひどいかんしゃく、制御不可能な衝動？おそらく単独犯だろう。意外と若い？そう、思春期くらいの子供。だとしたら、家庭に問題が？

「・・・様、あやしい様？」

「え？ああ、ごめんなさい」

悪い癖だ。いや、習慣かな。とにかく、そんなことを考えるために、ここにいるのではない。

「問題ないのなら、もうしばらくここに泊まりたいのですけど？」

「それは、大丈夫ですが、でも・・・」

「私は気にしないわ。もう一度秋刀魚のすまし汁が食べたいし」

「はい、そう伝えておきます」

「それから私は「あやなす」です」

「あ、すいませんでした」

仲居さんは勢いよく頭を下げた。

「いいのよ、珍しい苗字だしね」

私は何気なく外に目を向けた。透明感のある薄い雲がゆったりと流れているのが見える。

「観光に行つてきます。お昼は外で済ませます。夕飯は、お願いしますね」

「かしこまりました」

仲居さんはもう一度深く頭を下げた。

旅館の外に出て、日の光に目を細める。車の通りが極端に少ないせいだろうか、空気がとても綺麗で、淀みなく私の中を満たしている。川の水もとても綺麗で、水面で日の光がキラキラと輝いている。どれも初めて見る光景だった。澄みきった空気を思いつきり吸い込むと、鼻の中がツンとした。冬はもう近い。そう思える瞬間だった。私は当てもなく、道路の真ん中を流れている小川に沿って歩き始めた。

歩いている私の頭に何か落ちてきた。髪を梳くようにそれを摘み取った。落ちてきたのは鮮やかに身を染めた楓だった。

「・・・紅」

鮮血を連想させる色。

「ああ・・・」

きしむ鼓動に揺さぶられる体。血管を流れる血の音が聞こえる。徐々に硬直していく肉体。

(落ち着いて、自分をコントロールするの)

「・・・うる、さい！」

自分の声で我に戻ると、雑念は姿を消した。辺りを見回すと、誰も私の声には反応していなかった。ただ流れるように歩みを進めて

いる。

私はゆっくりと拳を開いた。手の平にはクシャクシャになった楓と、古い爪痕が残っていた。

「・・・ごめんね」

私はそう言った後、楓を小川に流した。微かな波紋が生まれると、楓はゆらゆらと流れていった。私はそれを追うように、再び歩みだした。

私は2ヶ月前まで、都会で精神科医をしていた。他のことには目を向けず、同期や男性と張り合うように仕事をこなし続けてきた。そんな私は今年の夏、宝くじで3億円を当てた。それから暫くして、私は逃げるように荷物をまとめ、家を飛び出した。何も考えずに駅まで走り、ゴミ箱に携帯電話を捨てた後、行き先も分からない電車に飛び乗り、あちこちを流れ続けた。その結果、私は今、名前も知らない町を歩いている。

（今思えば、何をあんなにムキになっていたのだろうか）

そう考えたところで何も変わらない。反省でも言い訳でもあるからだ。それに過去は変わらない。人の足跡は決して消えない。心を失くさない限り。

私は町外れの、小さな山のふもとに辿り着いた。隙間なく紅葉を纏った木々は、私を誘うように風になびいている。

（・・・大丈夫、だよな）

さっきのこともあり、少し怖い気もしたが、私は木々の誘いに乗ることにした。もしかしたら、自分を傷つけないだけかもしれない。そう考えても、私の足は止まらなかった。

（今も昔も一緒だ。私は一体、何をしたいのだろうか）

山道は不思議なことに、あまり人が踏み入れた様子は無かった。

（町外れだから？それとも、熊でも出るのかしら？）

木漏れ日に目を細め、手を翳しながら、眠っている山を起こさないように静かに歩き続けた。

歩き続けて10分位だろうか。山道は開けた場所に繋がった。そこには、手入れが行き届いている綺麗な教会が建てられていた。日の光に輝いているステンドグラスに惹かれるように私は歩み寄った。「こんな所にも神様がいるのね」

私は扉を少しだけ引き、中を覗きこんだ。

「入りますよ？」

私は何故か、体を横にし、滑り込むように中に入った。

「誰も居ないんですかあ？」

私の声が響いても返事はない。木霊が消えると、教会の中は静けさを取り戻した。

辺りを見回すと、壁に沿って大きなこげ茶色の本棚が目付いた。本棚を目で追っていくと、部屋を一周してしまった。

「凄い本の数、まるで図書館ね」

私は本棚に綺麗に並んでいる本を眺めた。本棚には埃一つなく、本の保存状態も素晴らしいものだった。

「潔癖症？・・・！」

本の題名を流れるように眺めていると、私は一冊の本に目を奪われた。

「夜葬曲の・・・下巻！」

私はこの本の上巻を読んだことがあった。サスペンスとホラーを合わせたような作品。私はずっと下巻を探し続けていたが、見つけることが出来なideいた。

「こんな所にあるなんてね」

私が入り指で本を傾けた。その時だ、

「ここに神はいない」

声が響き渡った。

「あの、ごめんなさい」



振り返ると、杖を突いた若い男性が立っていた。

「あの、私、教会の中を見せてもらおうと思ひまして」

「確かに外観は教会だが、ここは僕と主の家だ」

若い男は瞬き一つせず、私を見続けている。私は少しだけ、体が震えた。

「ごめんなさい、家だとは思わなくて」

「この外観では無理もない」

「すぐ、出て行きます」

「そうしてくれ」

若い男は表情一つ変えずに言い放った。

私は傾けた本を元に戻し、そそくさと扉に向かった。

「本当に、失礼しました」

若い男は何も言わず、私を見送った。

私は自分を落ち着かせる為に溜め息をつき、空を見上げた。真上にある太陽が、まだ正午であることを伝えている。私は扉から離れ、建物に目を向けた。

「どう見ても教会だよね」

そう呟くと、

(この外観では無理もない)

さっき聞いた声が、後に続いて心に聞こえた。

(悪い人じゃないよね)

そう思うと、瞬き一つしない瞳が後に続いて思い出された。

「.....」

私は山を降りることにした。

## 2・屈む背中

### 2・屈む背中

初めて訪れた町。それにも拘らず、町の住人たちは主人公のことを知っていた。誰もが氷のような目で私を蔑む。誰もが濁った目で私を恐れる。

その町で出会った一人の老婆と、右目の赤い猫。廃屋と化した血塗られた神社と、そこに祀られている一本の刀。

深い泥の奥にある記憶。全てを自分の手で掬い上げ、更には自分すら知らないことを知る。

湧き上がる黒い感情。その支配から救ってくれた守人。

その後主人公は・・・。

「どうなるんだろう?」

教会で本を見かけてから2日。私はすっかり欲求の虜になった。悶々としながら寝返りを繰り返す午後3時。窓の外を見上げると、清々しい空がまだ青白さを保っていた。

「・・・貸してくれるかな」

旅館を出て、のんびり歩きながら教会を目指す。一步一步靴の踏みしめる感触を感じながら歩くのは、私にとってはとても新鮮で気持ち良かった。いつも体を横にしながら、人の間を忙しく歩いていた自分がとても滑稽に思えてくる。

上着のポケットに両手を入れると、手ぶらであることの身軽さを感じた。

私はいつも、膨大な資料の入ったカバンを左手に持ち、新聞を左の脇に挟んでいた。そして、右手はポケットの中で鍵を握り締めていた。こうすることで「私は間違いなく、家の鍵を閉めた」と無言で言い聞かせることができた。立派な強迫神経症だ。だから私は、鍵

を持つ必要のない旅館を選んだのだ。それも、無意識の内に。こうやって旅行をしているのも、ただの同遁走<sup>どうとんそう</sup>で、立派な精神病の症状。そう考えると、自分の行動全てが症状に思えてくる。精神医学を学ばなければ、こんなことを考えずに済んだかもしれない。何も知らなければ「宝くじを当てた、ただの気楽な女」でいられたかもしれない。でも私は知ってしまった。心理が起こす行動の意味、深層心理が持つ訴え。私はもう逃げられない。逃げ切るには、死ぬか、心を亡くすしかない。

「まるで夜葬曲の主人公ね」

そう薄っすらと口に出すと、私が知りたかったのは物語の続きではなく、私に似た主人公がどんな選択を選んだのか。であることに気が付いた。

「・・・やめよう、きりがない」

私は目の前に建つ、教会の扉にそう言った。

私は扉を少し引き、出来た隙間から、

「すみません、誰かいますか？」

と言った。

中から返事はない。私はもう少し扉を引き、中を覗きこんだ。

「この前訪れた者です。あの、お願いがあつて来たのですがあ」

この前中で会った人は杖を付いていた。だから出てくるのに時間が掛かるのだろう。そう思い、私は待つことにした。

深い息を鼻から出しながら視線を下に向けると、小さな靴が落ちていているのに気が付いた。

（子供の靴？）

私はしゃがんで床を見回した。すると、長い椅子の隙間から、草臥れた様子の細い足が見えた。

私はその瞬間、全身が身震いを起こした。

「大変！」

私は扉を引き放つと同時に、中に駆け込んだ。

「大丈夫？しつかりして！」

私は倒れていた子の上半身を静かに起こし、問いかけた。

「………」

まだ幼い女の子だ。

「ねえ聞こえる？返事をして！」

そう言つと、女の子はゆっくりと目を開けた。

「……よかった」

女の子は私の顔を見ると、逃げるように視線を逸らし、衰弱した腕で私から逃れようと力なく抵抗し始めた。

「安心して、私は、」

言葉が詰まった。

「私は……」

何者、なのだろう。

女の子は無言のまま、私の腕の中で抵抗を続けている。苦しそうに口を開け、訴えている。私は今までの経験で悟った。この子は失語障害であると。

（精神障害？それとも脳巣障害？この怯え方、きつと精神障害だろう）

「また君か、ここは教会ではなく家だと説明しただろう」

家の奥から杖を突いた若い男がようやく出てきた。

「そんなことより、この子はどうしたの？」

私は少し荒い声で言った。

「昨日からずっとここに居る。出て行くように言ったのだが、言うことを聞いてくれないでいる」

「それで？ずっと放っておいたの？」

「仕方ない」

若い男は間を作らずに、声色を変えずに言った。

「あなたそれでも人間なの？！」

「僕は人じゃない」

沸々と怒りがこみ上げてくる。

「よく平気な顔でそんなことが言えるわね」

女の子を抱く手にも力が入る。それを敏感に感じ取ったのか、女の子の体が強張った。私は自分を諷めた。

「とにかく、病院に連れて行かないと」

私は女の子を抱きかかえ、起き上がろうとした。しかし女の子は両手で椅子につかまり、放そうとしない。

「ねえお願いだから言うことを聞いて」

私がそう言っても、女の子は首を振り、手を放そうとはしなかった。

（声は聞こえている。言葉の意味も分かっている。やっぱり声が出ないのは脳巣障害だからじゃない）

「ずっとこの様子のままなのだ。何とかしてほしい」

若い男の言葉に、再度怒りがこみ上げたが、今はそんな場合じゃない。

「見たところ、栄養失調みたい。何か食べる物はある？」

「無い」

「一つも無いってことはないでしょう？」

「何一つ無い。僕には必要ないからね」

本当に・・・腹が立つ！

「あなたって人は！」

「さつきも言ったが、僕は人じゃない。僕はロボットだ。人の形をした機械だ」

「もういい！」

私は女の子を椅子に下ろした。私の声に恐れを抱いたのか、しきりに震えている。

「この子を見ていて、危ないことをしないようにね。私は食料を買ってくるから」

私は一方的にそう言い放ち、教会を飛び出した。

「あの男・・・っ」

私は頭を振って雑念を払い、今、するべき事を一番前に置いた。消化が良く、栄養のある献立を考えながら、私は形振り構わず走り続けた。

あの子の目には、恐怖心と不安が宿っていた。それに草臥れた足と靴。何かから逃げてきたように思える。何から？風の音？揺れる並木？車の走る音？人々の話し声？

あの子は私を怖がっていた。私が女だからだろうか？

（僕は人じゃない。僕はロボットだ。人の形をした機械だ）

私が人間だからだろうか？

「・・・まさかね」

私は肩で息をしながら、教会の扉を開いた。

「キッチンは何処？」

「右の奥」

若い男は椅子に座ったまま答えた。私は呼吸を落ち着かせながら、壁に沿って歩き出した。途中、あの子の様子を窺うと、静かに眠っていた。

「あなたは、何をしていたの？」

私が若い男に訪ねると、

「この子を見ていた。君がそう命じたではないか」

と言った。女の子に視線を向けると、隣に座っている若い男の裾を摘んでいるのが見えた。

「・・・キッチン、借りるわね」

キッチンは綺麗に整っていた。しかし、使い込まれた様子はなく、生活感が感じられない。

ガスコンロのつまみを捻ると、青白い炎が灯った。私はホツとしながら、壁に掛けられた鍋をコンロに置いた。続いて牛乳を注ぎ、ビスケットを割って入れた。

「出来たわよ」

私はお皿に盛った食事を二人のもとに運んだ。人肌程度に冷ましたにもかかわらず、大げさに湯気が出ている。秋だからだろうか？  
「起きて、ご飯にしましょう」

私はお皿の乗ったお盆を椅子に置き、優しく女の子の肩を揺すつた。

「……………」

女の子が目を覚ますと、再び瞳に不安と恐怖心が宿った。私は胸が痛くなった。

「安心して、ご飯を作ったから、一緒に食べましょう」

私はそう言つて、女の子にお皿を差し出した。女の子は震える手を胸元に運んだ。

「みんなで食べましょう。お腹、空いたでしょ？」

女の子の目から恐怖心がゆっくりと消えていった。そして指先を伸ばし、お皿を受け取った。

私は……堪らなく、嬉しくなった。

「はい、これはあなたの分」

私は若い男にお皿を差し出した。

「僕の？」

「そうよ」

「せっかく作つてくれて済まないが、僕は食べるという行為が出来ない」

「……機械だから？」

「そうだ」

私は呆れて溜め息をした。

「もういいわ」

私は差し出したお皿を引っ込め、自分で食べ始めた。

「美味しい？」

私が女の子にそう話しかけると、視線を私に向け、小さく口を開いた。唇から言葉が生まれることはなかったが、不味くはないということは何となく分かった。

「それは美味しいのかい？」

無機質な声で、若い男はそう言った。

「不味くはないと思うけど、私は料理が得意じゃないから」

「得意？得手不得手のことだな」

不思議な言い方をする。どこか違和感があって、何と云うか……

「そう、ね。同じ物でも誰が作ったによって味は変わるから」

私は何となく、教えるように、学ばせるように言ってしまった。

「分からない」

彼は……本当にロボットなのだろうか？

私は食べ終えたお皿を椅子に置いた。

「ねえ、手を出して」

若い男は無言で両手を差し出した。私は両手を摘んだ。

「！……体温が低い、冷たすぎる」

それに血管がないし、手触りに違和感がある。

「……どうということ？」

「僕の体は常に20度を保つように造られている」

「この皮膚は？」

「これは人工皮膚だ」

私は恐る恐る脈を測った。

「……ない、脈拍がない」

「僕には心臓がない、従って呼吸もしない。だからだろう」

「……信じられない。あなた、本当に、」

「僕は機械だ。ロボットだ」



まるで映画だ。しかし、考えることに疲れているせいか、私はこれ以上疑う気になれなかった。

「あなたを生んだ人は？」

「造ったのは博士だ」

「今何処に？」

「分からない、5年前に出て行った」

「・・・そう」

「僕がロボットであると分かったかい？」

瞬きをしない彼の目からは、何も読めないし、何も感じない。ただじつと私を見据えている。目を逸らさずにはいられなかった。

「簡単には信じられない。でも現に、あなたは脈もなしに生きている」

理屈を探そうとする自分がいるのだけど、思考を止めようとする自分もいる。

「もうお腹いっぱい？」

私は空のお皿を抱えている女の子に問いかけた。

「・・・」

女の子は小さく頷いた。

「そう」

私は立ち上がり、空になったお皿を受け取った。女の子は俯いたまま小さく口を開いた。

「うん、また作ってあげるからね。そうだ、君の名前は？」

女の子は小刻みに首を動かした後、ポケットからハンカチを取り出し、私に見せた。ハンカチには刺繍が施されている。

「M 05・Ap11？」

「認識番号ではないか？それが、シリアル番号か」

「ふざけたこと言わないで！この子は人なのよ」

とっさにそう口にしてしまった。

「ごめんなさい」

差別的な言葉を、私は悔やみ、反省した。

「何故謝る？」

「・・・・・・・・・・」

「Aprilは、4月11日生。誕生日を意味しているのかしら？」

「誕生日とは？」

「生まれた日のこと。って、知らないの？」

「知らない」

嘘は言っていない。顔がそう物語っている。

「私の誕生日は4月13日。あなたが生まれた日は？」

「生まれた、という言葉は僕には正しくない。初めて起動した日は9月3日だ」

「・・・・・・・・深く考えないことにしよう。今はこの子のことが先。」

「Mは・・・・イニシャルかしら？だとしたら、特定するには難しいわね」

M・・・・M・・・・。そう心の中で跳ね返っている。そして、私の心の中にある名前とぶつかった。

「真理・・・・」

「まり？確かにMだな」

「あ、違う、この名前は、」  
心が震えた。

「聞いてみればいいだろう。君は真理という名なのか？」

男がそう尋ねると、女の子は男の袖を摘んだ。

「どういう意味だい？」

本当に真理という名前なのか、それとも気に入ったのか。どちらにしる、私には辛い名前だった。

（思い出したくない？また逃げる？）

「・・・・・・・・・・」

（どうせ逃げられやしない。それなら、）

「真理が正しい名前なのかは分からない。けど、嫌じゃないみたい」  
「そうなのか」

「そう思えるよ。だからそう呼んであげて」  
「分かった」

男は素直に聞き入れた。偏見や差別が全く感じられなかった。その姿は、心のままに生きてるように思える。確かに、人ではないのかも。

「あなたは？何て名前？」

「僕は名前を教えられない。そうプログラムされている」

何の為にそんなプログラムを？

「だが、名前を尋ねられた時は、「K」と答えるようにもプログラムされている」

「K？それも、イニシャル？」

「・・・そうなるね」

「そっか」

融通のきかない返答に呆れながら、私は窓に目を向けた。黒に近い群青の空が見えた。

「もう帰らなくちゃ」

「真理はどうすれば？」

「この子は、」

喉に詰まった言葉。

「・・・真理は」

私は無理やり吐き出させた。

「ここを出たがらない。外が怖いみたいなの。それに心の病気で、言葉を話せなくなってる。今は無理をさせては駄目。だからここに居させてあげて。明日、また来るから」

「分かった」

私は旅館に戻ることにした。

「それと、私の名前は「織」、憶えてね」

「しき、記憶した」

「それじゃ」

私は教会を後にした。

帰り道、色んなことが心の中を駆け巡っていた。真理のことやKのことは勿論だけど、一番は自分のことだ。

突然出逢ってしまった真理という名。いや、巡り会ったと言っべきかもしれない。あの子とは違うと分かっているけど、心の中で重なってしまう。

「・・・・・・・・」

心に現れる陰りは、夜の山道と一緒に。一寸先も見えない。前に広がるのは暗闇だけ。上には星が灯っている。でも、遠く、手の届かない灯り。

「・・・・・・・・」

それでも歩かなくちゃいけない。彷徨はなければ、いつまでもこの場所のままだ。

「本、明日借りなくちゃ」

### 3・汚れた手

#### 3・汚れた手

いつもより寒い朝。寒さに耐え切れず、たまたま目に留まったコートを買って羽織り、紙袋に入っている本を脇に抱え、私はまた山道を登り歩いている。

コートのポケットにしまい込んだ手が、鍵と携帯を探している。習慣は簡単には消えないってことだ。小さいことだけど、これも立派な心の病。

(心の・・・病)

私の中で連なる言葉。順を追うように、正しく繋がる言葉。何度も何度も繰り返し返した証。

(・・・真理・・・)

Mというイニシャルだけで勝手に付けた名前。今思えば、軽率だった。衝動に駆られて結果だけど、それが自分を追い込んでいる。

それでもあの時は、確かな強い気持ちがあった。

でもそれは一瞬の儂い命。朝目が覚めると滲んでばやけていて、掬い取れないものになっていた。

(私は・・・どうしたいの?)

私は知っている。自分が許されたいだけだと。その為にあの子を、真理を救いたいと思っっていることを。

(利用。偽善。利己的都合)

それも全部分かっている。だからって、このまま見捨てられない。その気持ち、私に残された最後の宝。

教会の扉を開けると、昨日と同じ位置に座っているKがいた。私には、Kが昨日からずっと、微動すらしていないように思えた。

「入るわね」

「声の主は、織だな」

Kは振り返らずに言った。

私は扉を閉め、歩み寄った。

「ずっとここに座っていたの？」

「そうだ。真理が放してくれなかったのだ」

視線を隣に落とすと、長椅子の上で横になり、膝を抱えるように震えながら眠っている真理がいた。真理の小さな手は、しっかりとKの着ている服の袖を摘んでいる。

「震えているじゃない！こんなに寒いんだから毛布くらい掛けてあげなさいよ」

私は着ているコートを脱ぎ、真理に掛けてあげた。

「人間は不便だな」

「人は万能じゃないの。間違いだってするし、後悔だってする。理屈じゃないの」

Kもなく、自分に言っているように思えた。

「・・・話が反れたわね」

「そうなのか？」

「はいこれ」

私はコートを脱いだ時に落とした紙袋を拾い上げ、Kに差し出した。

「何だ？」

両手で丁寧に紙袋を受け取ると、朝日に目を細めることなく私を見上げた。

「開けてみて」

Kは受け取った紙袋のテープを綺麗に剥がした。

「本だな。「誰にでも作れる料理百選」それと「体に安心な料理の作り方」か」

「何が言いたいかわかる？」

「・・・分からない」

「良くも悪くも素直だ。」

「真理はここから出たがらない。だからあなたが真理の食事を作つてあげなきゃいけないの。料理は？したことがある？」

「試したことはない」

「じゃあ学ぶことは？」

「僕は無限に物事を学ぶことが出来る。だから問題無い」

「じゃあ頼めるわね？」

「引き受けよう」

「何故？どうして？」と、Kは聞き返さなかった。そのことに、私は内心ホツとしていた。

「それじゃお願いね、今朝の朝食は私が作るから。キッチン借りるわよ」

心の傷を持つ子供は、親を含めて人を恐れる傾向がある。そして人を避け、閉じこもったりする。真理がここに来て出たがらないのもそうなのかもしれない。

ではどうして閉じこもる場所が家ではないのだろうか？・・・虐待？喋れなくなつたのもそのせい？

・・・そう言えば、人の集まるところで、自分の言動が不適切で人に軽蔑され、馬鹿にされるのではないかという恐れから、緊張が高まつて言葉を話せなくなることがあるって聞いたことがある。

もしそうなら、対人恐怖と失語障害の両方が当てはまる。・・・真理は家じゃなくて施設に居たのでは？そこから逃げ出し、ここに来た？

朝食を作る私の手は、いつの間にか止まっていた。

「・・・はあ」

深い溜め息をつき、両手で目を覆う。

「また学説が先行している。これじゃあの時と同じじゃない」

両手を目から離し、ぼやけた目で自分の手を見る。

「……………」

私は何も言わず、思わず、料理の続きにとりかかった。

「お待たせ。真理は？起きてる？」

「まだ眠っているようだ」

私はお盆を椅子の上に置いた。

「起きて。ご飯にしましょう」

私は真理の肩を優しく揺すった。するとビクツとするように真理は起き上がった。私の顔を見ると、虚ろな瞳に不安が宿り始めた。

「……胸が痛い。でもそれを私が顔に出しちゃ駄目だ。」

真理はキョロキョロと落ち着きなく辺りを見回し始めた。何かを探しているようだ。

（…………時計？）

「何も心配しないで。ご飯作ったから食べましょう」

私がそう言うと、真理は小さな両手で顔を撫で始めた。

「……顔、洗いたいよね？」

真理はぎこちなく頷いた。

「K、洗面所は何処？」

「キッチンの隣だ」

「あ……………」

私はKにお願いしようと思ったが止めた。

「……私と一緒に行きましょう」

私は真理の小さな手を掬う様に握り、洗面所へと向かった。

「石鹸もないし、タオルもない。歯ブラシもないね」

真理は不安そうに首を傾げた。

「でも大丈夫、そうかもと思って買っておいただ」

私はそう喋りながら買い物袋の中をかき回した。

「はい、これ使って」



私からタオルと石鹸を受け取ると、真理は洗面台の前に立ち、背伸びをして蛇口を捻った。そして慣れた手つきで石鹸を泡立たせた。「上手ね。いつもやってるからかな？」

習慣。と言うよりは、私はどこか機械的な、流れ作業のような印象を受けた。

「・・・真理ちゃんから見たら、私はお姉さんかな？それともおばさん？お姉さんってことはないよね、私32歳だし。真理ちゃんはいくつ？」

「・・・」

「いつか、教えてね」

洗顔を終えた真理はキュツと蛇口を捻った。そしてタオルで顔を拭き始めた。

「歯磨きにご飯食べてからにしましょうか」

真理は丁寧にタオルを折りたたみ、洗面台の脇に置いた。

「それじゃご飯にしましょう」

私が真理の手を取ろうとしたその時だ。真理は右手を大きく開き、私の前に翳した。

「・・・ん？」

私が首を傾げると、真理は左手を胸元にやり、寂しそうに視線を落とした。

「・・・！そっか、5歳ね。真理ちゃんは今、5歳なんだね？」

真理は視線を上げ、口元を緩め、小さく頷いた。

「そっかぁ・・・そうなんだ」

私は真理の震える手を両手で握り締めた。

「そっかぁ・・・そうなんだ」

私はたまらなく嬉しくなった。胸の奥が熱くなっていく。鼓動に合わせてるように目の奥に潤いが満たされてくる。

「ご飯・・・食べよう」

朝食を済ませた後、私は町に降りて買い物に出かけた。山ほどの食材と、真理の為の、身の回りの物を買ひ、教会へと戻った。

「お・っもい」

両手が塞がったまま扉を開けようと試みたが、手が上手く上がらない。かといって荷物を一旦降ろすのも面倒だ。そこで私は頭で扉をノックした。

「K、居るんでしょ？開けてくれない？」

「・・・暫し待て」

扉が開くと同時に、私は滑り込むように中に入った。

「凄い荷物だな、手を貸そう」

Kはそう言うと、杖を壁に掛け、私の荷物の大半を担いだ。

「なんだ・・・普通に歩けるんだ」

私は膝に手を当て、肩で息をしながら言った。

「何処に運ぶのだ？」

「・・・キッチン」

「分かった」

キッチンに向かって歩き出したKを、私は無言のまま見送った。

その後で大きく息を吸い込み、真理のところへ歩み寄った。

「真理、これ、買い物のお土産」

私は無造作にビニール袋に手を入れ、手当たり次第に真理の隣に出して並べた。

「絵本が3冊、スケッチブックにクレヨン」

私は一つずつ指をさして物の名前を教えた。

「少しの間、ここで待っててね」

私はそう言い残すと、キッチンへと向かった。

「この荷物をどうするのだ？」

「食料は冷蔵庫にしまって。野菜は一番下の段に、果物は真ん中、それ以外は上の段に。飲み物はドアの内側にある棚に入れて」

「分かった」

「調味料は水道の下の収納場所へ、日用雑貨は・・・食器棚の下に」  
私は吐き出すように一気に喋った。

「・・・憶えられた？」

「問題ない」

Kは答えながら収納を始めた。戸惑うことなく、的確で素早い。

「・・・」

私はKが本当にロボットなのかどうか、深く考えていなかった。  
正直なところ、どうでもよかった。

「足、大丈夫なの？」

「今のところ問題ない」

「足のどこが悪いの？」

「人体で言うと、足の、付け根の軟骨の部分だ。僕に軟骨は無いが、代わりに、関節の磨耗を防ぐ為の合成物質がある。それが完全に磨り減ってしまったって、関節が劣化し始めているのだ」

「合成・・・物質？」

「合成樹脂の様な物だが、それとは違う」

「よく分からないけど・・・痛いのか？」

「・・・分からない。僕は感じる事が出来ないからね」

淡々と喋りながらも、Kは作業を続けている。

「直せ・・・治らないの？」

「僕には直せない。部品の生成は博士にしか出来ない。記した書物もないし、設計図もない」

Kはロボット。信じられないとか、疑わしいとか、そんな心は、今は全く無かった。ただ目の前にあるのが真実。それだけがすんなりと私の中に入ってきた。

「分かってもらえたかい？僕がロボットであると」

「んん、分かったよ」

「そうか。今までに何人もの人がここを訪れたが、事実だと分かってもらえたのは織が初めてだ」

私は、何て言えばいいのか分からなかった。どうしてだろう・・・  
自分の心が分からない。

「僕も聞きたいことがある」

「・・・何？」

「真理が言葉を話せないのはどうしてだ？」

「・・・そうね・・・」

何と答えるべきなのだろう。いや、何と教えるべきなのだろう。

「原因は・・・分からない。ただ、心の病気であることは間違いないと思う」

「心の病気？」

「そう。辛いこと、悲しいこと、そんな精神的ストレスが積み重なって、言葉を奪った。たぶん、そうだと思う」

「・・・分からない」

「複雑な心を持つているのが人間なのよ」

私がそう言うと、Kは私の傍に歩み寄ってきた。

「いつか話せるようになるのか？」

心が震えた。私の核心に迫る言葉。

「・・・・・・」

私にはもう・・・誰も救えない。また取り返しのつかない事になるかもしれない。それが怖い。

「私は・・・何とかしてあげたい」

宙ぶらりんでも、半端でもある。でも、その心が確かに私にはある。

「きっと、何とかなるよ」

これが、今の私の、精一杯の答え。

「どうすればいいのだ？」

「そうね・・・。まずは、話せるようになりたいと、真理自身が強く思うこと。そして、言葉を失った原因を知って、それに打ち勝つこと」

「・・・詳しいな」

「それは・・・私が元精神科医だから」

「精神科医とは？」

「心の病を治す・・・そう、手助けをする人のことよ」

今になって、ようやく分かった。治すのは私ではなく、本人自身だということ。私がするのは、その手助けだということ。

「その精神科医というのは、学んで習得したものなのか？」

「そうよ・・・どうして？」

「つまり、人の心を学ぶ、マニュアルがあるのだな？」

心が激しく動揺した。

「違う！」

揺れる大地。浮かぶ過ち。

(自分をコントロールして！)

「心を知る、マニュアルなんて、ないのよ」

「・・・そうか」

私は過ちからそれを学んだ。大きな代価の代償として。

「真理のところへ戻る」

Kはそう言つと、ゆっくりと歩き出した。

「あ、待って」

私はKの背中を呼び止めた。

「今は、真理にいつぱい話しかけてあげて。答えは言葉では返ってこないかもしれないけど、必ず・・・表れているから」

「・・・分かった」

「真理はね、あなたのことが気に入っているみたいよ」

「何故？僕がロボットだから？」

「さあね、そうかもしれない。けど、あなたのことが好きだということに変わりはない」

「好き・・・とは？」

「学びなさい。・・・真理から」

「分かった」

Kは再び歩き出した。私はその背中を、深呼吸した後で追い駆けた。

私は・・・心を深い海の底に沈め、深い氷に閉ざした。何も届かない場所なのに・・・今は青く、揺らめく光が遠くに見える。

「何を読んでいるのだ？」

Kの言葉を聞いた真理は、本を閉じてKに差し出した。

「本。絵本だな」

本を受け取るK。

「読んであげたら？」

私は礼拝堂の入り口から、離れた場所に座っている二人に大きな声でそう叫んだ。

真理は小さく何度か頷いた。私にはそう見えた。

「分かった。そうしよう」

Kには真理の心が伝わったのだろうか？

Kは本を開き、書いてある文章を緩急無く読み出した。真理はKの隣から本を覗き込んでいる。それを、離れた場所から眺める私。

心を捨て、抜け殻になりたい。空っぽになって、ただ流されたい。ずっとそう思っていた。けど、私は捨てることが出来なかった。ずっと隣に置いていただけだ。ずっしりと重い心が、静かに私と重なり合う時を待っている。

「私も・・・仲間に入れて」

私はもう一度全てを背負い、歩み寄ることにした。

## 4・蔑む眼

### 4・蔑む眼

精神面の基本的な部分、つまりは活動、気分、行動の傾向。これらは生まれつき、ある程度身についていると言われている。でもそれは底辺の部分でしかない。

人間は生来の性格素質を持ちながら、さまざまな体験を重ね、連ねて大人になっていく。これが成長であり、歳を取るということ。

幼児期は目に映る人々の感情や態度や行動を真似して、自分のものにしていく傾向がある。

「・・・分かった？」

「分からない」

「ああ・・・そう」

奇妙な生活が始まり、もう何日もたった。

真理は相変わらず喋らない。そんな気配もない。そしてここから外に出ることもない。それではいけないと思った私は、Kに色々協力してもらおうと思ったのだけど・・・。

「理屈は分かった。しかし、僕がどうすればいいのかが分からないのだ」

「それは・・・うん」

そう言われると、私も何を言えばいいのか分からなくなってしまった。

「つまり、どういう時に人が怒ったり、悲しんだり、喜んだりするのかを見せなきゃいけないの。さっきも教えたけど、子供は見るだけで物事を学ぶことが出来るからね。言葉だつて習わなくても、聞いているだけで自然と話せるようになるし、意味も理解出来るようになっていくの」

「だから僕にたくさん話しかけるようにさせたんだな？」

「そうよ」

もちろん、それだけじゃないけれど。

「しかし僕は、言葉は知っていても、どういう時に怒ったり、悲しんだり、喜んだりするのかを知らない。僕はロボットだからね」

僕はロボット。もう何度も聞いた言葉だった。その言葉を聞く度に、私は何とも言えない気持ちになる。

「・・・織はどういう時に、そんな目をするのだ？」

「え？」

ハツと顔を上げると、瞬きをしないKの瞳が私を覗き込んでいた。「どんな時、だろう・・・。悲しさや哀しさでもない。何とも言えない気持ちの時、かなあ？」

私は目を逸らしてそう答えた。

「・・・分からない」

「・・・そうだよね」

私たちの要領を得ない会話を、真理はテニスのラリーを追う様に交互に私たちを見ながら聞いていた。

真理は私に脅えなくなった。でも、私とKを見るとき目が違うのに変わりはなかった。

「食事を作る時間だ。続きは食べてからにしよう」

「・・・そうね」

Kは杖を突いて立ち上がり、キッチンに向かって歩き出した。

ここからは、私と真理の時間だ。

真理は私が買ってあげたスケッチブックを開いて見ている。驚いたことに、もう半分以上使われていた。

「私にも見せてくれる？」

そう言つと、真理はスケッチブックを閉じてから丁寧に私に手渡してくれた。私はそんなさり気無い動作に、嬉しさを感じた。

(きつとKの影響ね)

受け取ったスケッチブックを捲ってみる。どの絵も適切な配色で



描かれている。知覚系統は正常、そのことに私は安心したが、描かれているのはどれもこの教会にあるものばかりだった。

（もつと色んな物を見せてあげなきゃ。それにはここから出て、色んな場所に行ってみるのが一番いいのだけど・・・）

そんなことを考えながら、私はページを捲っていった。

「・・・ん？」

書きかけのページ。そこには赤いクレヨンでリンゴの形だけが描かれている。後は塗り潰すだけのようだ。

「リンゴは赤い・・・かぁ。誰がこの色を赤って決めたんだろうね」  
真理は少しだけ首を傾げた。

「ねえ、この絵の続き、私が塗ってもいいかな？」

真理は少し考えた後、ゆっくりと頷いて、クレヨンの入った箱を私に手渡してくれた。

「ありがとう。ちよつと待ってて、リンゴ持って来るから」

私は持って来たリンゴを真理に手渡した。

「リンゴは丸いでしょ？丸い物を描くときはね、こうやって・・・」  
私は真理に見えるようにゆっくりとクレヨンを走らせた。

「形に添った線を描くの」

私は丸い線を、最初は大きく、段々小さく、緩急を付けて描いた。  
「それから、ここ。赤じゃなく、まだ緑色が残っているよね？だからここは緑色を使いましょう」

「・・・」

「ここはどう？赤と緑が混じっているよね？だからここは、緑の上から、少しだけ赤を塗りましょう」

真理は両手でリンゴを握り締めたまま、真剣な眼差しでクレヨンの動きを追っている。

「それから・・・ここ。ほら、光が当たって白く見えるでしょ？だからここは、白を使って、光沢を、出します」

「………」

「はい、出来上がり」

私は描きあがったスケッチブックを真理に手渡した。

真理はリングを隣に置き、両手で持ったスケッチブックを大きく見開いた目で眺め続けている。

「ちよつと練習すれば、真理ちゃんにも描けるようになるよ」

私がそう言うと、真理は口を開いて私を見上げた。

「食事が出来た。ダイニングルームに移動してくれ」

「続きは昼食を食べてからね」

真理は、いつもより大きく頷いてくれた。

「……美味しい」

以外にも、Kの作った料理は美味しかった。正直、真理が毎日何を食べているのか少し不安もあつたが、その不安はもの見事に打ち砕かれた。それどころか、自分が情けなく思えるというお釣りで返ってきた。

「本に書いてある通りに作った。99%で再現した」

「残りの1%は？」

「本に書いてある「適量」というのが分からなかった」

この場合、適量とは「今までの経験」を指しているのだけど……何て言えばいい？

「でも……本当に美味しい。私には作れないよ」

横目で真理を見ると、大きく口を開けて料理を頬張っている可愛らしい姿が見えた。

何故か私は、真理を真似るように食べ始めた。

「Kには料理の才能があるのかもね」

「どうして？」

「今食べている料理が美味しいから決まってでしょ？」

「それは間違っている。僕の料理が美味しいのではなく、本に載っ

ている料理が美味しいのだろうか？」

「それはそうだけど、私では本に載っている通りには作れない。人  
つてそういう者なの」

「不可解だな」

「でもね、人は失敗から学んで、それ以上のものを作ることが出来  
るの」

失敗から学ぶ。

不意に出た言葉だった。その言葉が過去の画を映し出した。  
思い出したくないからだろうか。その画は、その先を見せようとし  
ない。まるで目の前に写真を突き出されたようだった。

「では、才能があるのは僕ではなく、織かもしれないな」

以外な一言に、食事をする私の手が止まった。

「失敗から成功を学べる織には、その可能性がある。そういうこと  
なのだろうか？」

Kの声。

止まった画はいつの間にか消えていた。そして今を写している。  
私の心の一部は、時に置いて行かれている。止まった時間を動か  
すのは……やはり今なのだろうか。

「……そうかもしれない。Kの言うとおりかもしれない」

私の手は再び動き始めた。

「Kって……凄いよね」

「僕は理屈を言っただけだ」

「……」

理屈は理想の中心にある。

ふと、そんなことを思った。

お昼を済ませた後、私は真理と一緒に絵を描いた。周りの人が見

ればただ遊んでいるように見えるのだろうけど、これは治療の一種なのだ。

自由に遊ぶ中で、子供は色々な思いを表現している。私は、真理の内に秘められた感情や、心の状態を知り、治療の手がかりを探そうとしているのだ。とくに言葉を失っている真理には、この上ない方法と思える。言葉の代わりが、作品なのだから。

治療とはいえ、この時間は単純に楽しい。みるみる上達していく真理の姿が、私をワクワクさせてくれるからだ。食事の前に教えたことをもう自分のものにしていく。

(才能があるのかも。この道を示してあげるのもいいかもしれない)  
考え事をしている私の手は完全に止まっていた。ふと思考の中から戻ると、真っ白なスケッチブックが私を出迎えた。

(考え出すと止まらない。悪い癖ね)  
隣にいる真理に目を向けると、一心不乱に作品に向かっていった。その集中力は、幼子とは到底思えない。

真理は今まさに、鋭い覇気を放ち、思いを作品にぶつけ、秘められた感情を発散させているのだ。

今は自由にさせておく方がいい。そう思った私は、少し休むことにした。

「ちよつと休んでくるね」

真理は手を止めず、素早く頷いた。私はそつと立ち上がり、外の空気を吸うために扉に向かった。

「う……ん」

澄んだ冷たい空気が私の中を満たしていく。目の前には赤く染まった木々が群れている。

「いい景色ねえ。どうして誰もここに来ないのだろう？」

辺りを見渡すと、今度は艶やかな黄色に染まった木々が写った。

「秋真つ盛り」

私は秋の色彩を追う様に教会を回り始めた。

「・・・およ？」

丁度、裏手に回った時だ。Kの姿が見えた。Kは丁寧に洗濯物を干している。

「今日は洗濯日和ね」

まるで近所さんに離し掛けるように私は言った。

「織か。日中空が晴れている時は、布団とシーツを干すようにと博士に教えられた。そうすると太陽の匂いがするからだそうだ」

「太陽の匂い・・・」

空を見上げると、まぶしい太陽が強く輝いていた。その光は、颯爽と私を白い世界へと誘った。私は素直に目を閉じた。

「これが・・・太陽の匂い」

「分かるのかい？」

「ええ。白の香り。陽気の香り」

「僕は分からない」

「私だって、今しか分からないよ。常に陽のあたる場所に居たとしても、いつもこの香りを感じるとは限らない」

「どうして？」

「いつもこんな気分だとは限らないからよ」

「・・・分からない」

「いつか分かる時が来るよ」

「どうして？」

「どうしても」

Kはそれ以上何も言わなかった。私もそれ以上は説明しなかった。Kがこの時のことを思い出したら、その時に理解できるだろうと思つて。

「博士は・・・何処に行つちやっただらうね」

「分からない。ただ、果たさなければならぬ使命があると言つて

いた」

「使命？」

「そう。何のことは分からないが」

「Kを生んだのもその為なのかしら？」

「分からない」

何故、博士はKを生み出したのだろうか？正直なところ、好奇心が疼いて仕方ない。

「・・・どうして博士は・・・あなたを生み出したの？」

私は自分の心理に勝てなかった。

「僕は、人の心を学ぶために造られたのだ」

「人の・・・心？」

全身がゾクゾクした。

「そうだ」

心、つまりは感情のことだ。個性とも言える。

「博士は言っていた。科学でロボットは作れても、心は作れない、と」

「でも、それは、何の為に？」

「知りたいのかい？」

「・・・それは・・・」

私は今、決断を求められている。そんな気がした。踏み込んでいものなのだろうか？私が知っていいものなのだろうか？

「私は・・・知りたい」

考えたところで意図など分かるはずもない。私は自分に従うことにした。

「では案内しよう」

「・・・何処へ？」

「研究室だ。家の中にある」

そう言つと、Kはゆっくりと歩き出した。私はKの背中を追いかけた。

心を学ぶ。確かにKの性格、とくに周囲の人への態度、自分自身

の評価、生活上の諸問題への取り組み方は独特だった。今まで学んだことの結果と言えるのだろうけど、Kはこれらを何で学んだのだろう？

Kは扉を開け、中に入った。礼拝堂では、疲れたのか真理が椅子の上で、横になって眠っていた。

「ちょっと待ってて」

私は静かに真理に歩み寄り、上着を掛けてあげた。

「もういいかい？」

「ええ」

私の返事を聞いたKは、ステンドグラスの下にある教壇の前に立った。

「この下だ」

そう言うと、Kは床の赤い絨毯を捲った。すると地下室へ続く扉が現れた。

「ふう・・・まるで昔の映画ね」

私は少し呆れた声で言った。

「確かに、博士は映画が好きだった」

私たちは扉を開け、螺旋階段を降りた。Kが明かりを付けると、研究室が目を覚ました。

礼拝堂と同じ広さの研究室には、私には理解できない物が沢山転がっている。それに山積みになされた膨大な資料がそこら中に見られる。これこそ映画のワンシーンだ。

「ここで僕は造られた」

私はKの言葉に身震いをした。

「いいの？私がここに入って」

今更だが聞いてみた。

「入れてはいけない、という命令は受けていない」  
「そういう問題なのだろうか？」

「これが僕に関する資料だ」

Kは私に資料を手渡した。早速捲ってみる。

「・・・・・・・・」

見たこともない記号とアルファベットの並びの猛襲。意味不明の方程式とその計算。私に理解できるはずがない。

(何だか・・・知恵熱が出そう)

次々とページを捲っていくものの、私は何一つ理解できないままだった。

「・・・あ！」

久しぶりに見る日本語に、私は思わず声を上げた。

レポート

私は人の形をしたロボットを造り出した。忘れないで欲しいのが、人の形というところだ。つまりは、人形なのだ。空っぽの器であると認識して欲しい。

何が足りないか？それは科学では絶対に造れないもの。それは心。精神だ。

空っぽの器に精神が宿り、心が芽生えるのかどうか。人の持つ複雑な心を、理屈ではなく心で理解できるのかどうか。それが知りたかった。

ロボットが完成した時、私はこの家の外観をヒントに名前を付けた。皮肉な意味も込められた名前だ。しかし、その名前はこのレポートには記さないでおく。呼ぶ時は、イニシャルをとって「K」と呼んで欲しい。

Kには幾つか、原則としてルールを強いている。そのルールを少しだが記しておく。

1・自分の名前を教えるはいけない。名有的时候は、頭文字を取ってKと名のること。



2・危険に遭遇した場合、自分の身を守ることを優先すること。

3・自身から、人に深く関わらないようにすること。

これを読んでいる者は、目の前に立っているのがロボットだと信じた者であろう。そして、自ら深く関わった者であるはずだ。

私は宿命を果たすために、ここを立ち去らなければならない。

勝手な願いで申し訳ないが、どうか見届けて欲しい。器ではあるが、Kはもう一人の私の息子だ。どうか見届けて欲しい。

「……………」

多くを語らないレポートに、私は溜め息と共に肩を落とした。

「何か分かったかい？」

「分かったけど……分からない」

「その答えは矛盾している」

「……そうね。博士と一緒に」

博士の矛盾。それはKへのルールだ。

名のるな。自分を一番大事にしろ。自ら人に関わるな。

人ってそういう生き物なの？人との間に壁を作るだけのルール。

こんなルールに従っていたら、いつまでも心は学べない。そう思うのは私だけなのだろうか？博士は人の心をどのように考えていたのだろうか？

「K、あなたは心がどんなものか分かる？」

「分からない。僕はロボットだから」

僕はロボット。今ほどこの言葉が悲しく聞こえたことはない。

「博士は……どうすれば心が芽生えると考えていたのかしら」

「その質問の答えになるか分からないが、博士とこんな会話をした

「ことがある」

「K、人間は何で出来ているか分かるか？」

「はい。水と塩分、マグネシウムにアンモニア、」

「ああ待て、分かった。確かに、それは人の成分だ。仮に、お前が言おうとしているそれらの材料を全て集めたでしょう。それで何が作れる？」

「人です」

「それはちよつと違うな。材料を全て集めて作った場合、出来上がるのは・・・お前だ」

「分かりません」

「そうだろうな。簡単に言うと、出来上がるのは人の形をした器だ。人であるには何かが足りない。それが何か分かるか？」

「分かりません」

「そうだろうな。・・・答えを教えよう。足りないものは精神、心だ。では次の質問だ。人の心は何で出来ている？」

「分かりません」

「・・・知りたいか？」

「はい」

「・・・私が思うに、人の心は・・・【今までに出逢った人と、その人との記憶】で出来る。私はそう考えている。つまりは、思い出だ」

「思い出・・・かあ」

過去があるから、今の私がある。そう考えれば、確かにそうかも知れない。

そこまで考えていて、それをKに伝えたのなら、尚のことルールが引つかかる。Kはこのルールのことをどう思っているのだろうか？

「……もう出ましょう。真理が目を覚ましているかもしれない」  
「分かった」

私は聞かなかった。今は聞いてはいけない。そんな気がしたからだ。

久しぶりの地上。ステンドグラスを通る光が夕闇を告げている。

真理はまだ眠っているようだ。そっと忍び寄り、真理の側にあるスケッチブックを手に取った。

（良く描けている）

ページを捲るとそれはハッキリと分かる。

「一日でこんなに上達するなんてねえ」

ポツリとそう呟くと、真理が目を覚ました。

「……」

目を覚ました真理は、落ち着きなく辺りを見回している。

「大丈夫よ、落ち着いて」

私は真理の隣に座り、肩を抱いてなだめた。

真理の体が強張ったのが分かると、私は少し寂しくなった。

暫くすると、真理の小さな体から徐々に力が抜けていった。

「落ち着いた？」

私はそう言いながら、真理から手を放した。

真理が目を覚ました時、いや、それだけじゃない。何かに夢中になって、ふと我に返った時もそうだ。真理は必ず焦った様子で何かを探している。それが気になっていた。

「……」

「何を描いたのだ？」

Kが私たちの所に歩み寄ってきた。

「これが何か分かる？」

私はスケッチブックをKに見せた。

「リンゴだ」

Kはそう言ってから、椅子に置いてあったリンゴを手を取った。

「人の目にはこう映るのだな。僕の情報とは違う」

「私には真理の描いたリンゴは、美味しそうなりんご、に見えるよ」

「美味しそう？」

「そう。分かる？」

「欲求の一種だな？」

「まあ、そうね」

「美味しそう、か」

たった今、Kは何かを学んだのだろうか？

「そろそろ夕食を作る時間だ。織も食べていくかい？」

私はその一言が嬉しかった。

「折角だけど、今日は帰るわ。調べたいことがあるし。明日また来るから」

「分かった」

私は立ち上がり、扉の方へ歩き出した。

「あ、そうだ。K」

私は振り返り、Kを呼んだ。

「明日また来るから。分かった」

私は今の言葉のやり取りを再現した。

「こんな言葉のやり取りを、約束、って言うのよ」

Kは静かに私を見ている。

「真理、K、また明日ね」

「分かった。約束だ」

## 5・差等を生む舌

### 5・差等を生む舌

焼けた家からは、一家3人の遺体が発見された。出火元は裏手口のプロパンガス付近。原因は放火と見られる。

これは今朝の新聞の、一面に載っていた記事の内容だ。

「また放火かあ」

連続放火。私がこの町に訪れる前から続き続けている事件だ。

ついに死者が出た。

とも書いてある。

「ここまでエスカレートするなんて・・・普通じゃない」

記事の内容から想像すると、犯人は恐怖によるためらいがなく、速やかに確実な方法を選んでいる。私はそんな気がしていた。

(幻覚や妄想・・・あるいは何らかの使命感。統合失調症?)

私は新聞をたたみ、もとの場所に戻した。そして立ち上がり、コートを羽織った。

「お出かけですか?」

「ええ。夕食までには戻ります」

「今朝は霜が降りていますので、足元にお気を付けて、行ってらっしゃいませ」

そう言つと、仲居さんは深々と頭を下げた。

「ありがとう」

旅館の外に出ると、道がキラキラと白く輝いていた。靴の底でグリグリと踏みしめ、感触を確かめる。

(確かに滑るかも)

改めて足元に目を向けると、自分の靴が夏用のままだということに気が付いた。ここに流れ着いたのは夏の終わり頃。吐き出す白い

息が時の流れを抽象的に象っている。

「靴・・・買わなきゃ」

自分の足元を見たのは久しぶりだった。妙に懐かしい感じがする。その懐かしさは、次々と色や形を変え、私の脳裏に浮かび上がった。

どんとどんと、時間が逆行していく。

「織」

私を呼ぶ、懐かしい声。

「こつちこつち」

父の声だ。

「ほら、秋なのに桜が咲いているぞ」

そうだ。子供の頃に一度だけ見たことがある。秋に咲いた桜の花。秋の気候は春に似ているから、桜が春と間違っただけを咲かせることがあるんだ」

「・・・じゃあ次の春はどうなるの？」

「秋に蕾が咲いてしまったから、次の春には花は咲かないんだよ」

「・・・そんなあ。」

「仕方ないさ。桜の木だつて間違えることはある」

「・・・これからは秋に咲くようになるの？」

「いや、桜は間違いを認めて、またその次の春に向けてやり直すんだ」

「・・・やり直す？」

「そう。誰だつて失敗はする。だからやり直す。何処にだつてそれはある。家の庭にもね。忘れないでくれよ。たかさんの失敗があつて、たかさんのやり直しがあつて、たかさんの成功があることを」

子供の頃聞いた父の言葉。私はそれを人生に置き換えた。その結果、私は精神科医の道を選んだ。挫折や苦悩からの逃げ道に立ち、今までいた場所より先に進ませてあげたい。そう思ったからだ。

もつずっと忘れていた。その心を置き去りにして逃げ出していた。大事なことを思い出した今、私は置き去りにした場所まで戻って来られたということなのかもしれない。

なら、迷わず拾いあげよう。

「タクシー！」

大きな私の声に、大勢の人が振り返り、タクシーは急ブレーキで止まった。揺れているタクシーの窓をノックすると、運転手は後ろのドアを開けた。私は素早くタクシーに乗り込んだ

「急にごめんなさい。この住所まで頼めるかしら？」

「ん・・・と。町の外れだね。かしこまりました」

ゆっくりと流れ出す景色。これが、先に進むこと、なのかもしれない。

真理の規則正しい習慣がずっと気になっていた。結構なことなのだけれど、どこか脅えているし、大きなストレスを感じているように見える。どう見ても、のびのび育てられたという感じはしない。むしろ、徹底された管理の下で育った印象を受ける。

これはおそらく、家庭での教育ではない。もしそうだとしたら・・・

「着きましたよ」

施設ではないだろうか？

「どうもありがとう」

支払いを済ませ、タクシーから降りると、養護施設とは思えない近代的な建物が建っていた。

（住所、間違っていないよね？）

私はとりあえず、中に入ることにした。

「いらっしゃいませ」

ファミレスの定員のような感じで、受付の人は言った。

「ここは・・・養護施設ですよね？」

「はい、そうです。ご利用を希望ですか？」

目の前の女性は、軽い口調でそうでそう言った。まるで金融会社の受付嬢だ。

「あいえ、人を探していました」

「申し訳ありませんが、個人情報をお教えるわけにはいきません。規則ですから」

丁寧な口調の裏に、どこか冷たさを感じる。そんな声だ。

「そうね。質問が悪かったですね。では、10月の頭位に、行方が分からなくなつた子供はいませんか？」

普通なら大騒ぎになつていているはず。私は表情に表れるのを見逃さないように、顔色を注意深く窺つた。

「その子供のお名前は分かりますか？」

名前……。そういえば、私は真理の本名を知らない。・・・どうしよう。

「分かるのであれば、番号の方でお願いします」

「・・・番号？」

番号。その言葉に反応して、私はあることを思い出した。真理のハンカチの刺繍だ。

「・・・M 05・Ap11」

「少々お待ち下さい」

そう言うと、女性はカタカタとキーボードを打ち始めた。

ここまで全く顔色を変えていない。ここではないのだろうか？でもM 05・Ap11という番号に反応した。・・・これはどういうこと？

「分かりました。M 05・Ap11番はこの施設を知られていません」

「施設を出た？それはつまり、ここに居たと言つことですね？」

「そうですね」

まるで関心が無いような口調に、私は不快な気持ちになつた。



「ここを出たのは両親の意思ですか？」

「いえ、M 05・A p 11番の意思です」

心の底から感情が沸いてくるのが分かる。

「ふざけないで！あんな子供が自分の意思で飛び出すわけがないでしょ！どうやってたらそんな判断が出来るの！」

「自分から出て行ったので、そう判断しました」

「それは脱走と言うのでしょうか！」

「ここは刑務所ではありません」

「責任の放棄ではないでしょう！」

「この施設は、入るのも自由であれば、出るのも自由です」

「答えになってない。5歳の子供に、そんなことを判断できるわけがないでしょ！」

「しかし、これが規則ですから」

私は俯きながら、力いっぱい両手を机に叩きつけた。

「もういい。両親の居場所を教えてください」

「できません。規則ですから」

「教えなさい！」

「できません。規則ですから」

握られた手の平に爪が食い込むのが分かる。腹が立つ。自分のこと以上に腹が立つ。

「ここでは・・・子供を番号で管理しているの？」

「はい。大勢の子供を管理しているので、こちらが分かりやすいように、それから同じ名前の子もいるので、トラブル防止の為の配慮です」

「配慮？トラブル防止？管理？規則？」

（好き・・・とは？）

（・・・織はどういう時に、そんな目をするのだ？）

(失敗から成功を学べる織には、その可能性がある。そういうことなのだろうか?)

(僕は人の心を学ぶために造られたのだ)

(・・・僕はロボットだ)

「あなた達の方が・・・」

「何か？」

「・・・あなた達の方がよっぽどロボットじゃない！」

私は震えた声でそう叫んだ。しかし、その声に対して、目の前の人間は全く顔色を変えなかった。

「何のことです？」

「・・・」

私は何も言わず、背を向けた。そして施設を後にした。

さっきのやり取りがずっと心の中で繰り返されている。震える喉。興奮しているのか、余計に白く見える吐息。

今心を支配しているのは、怒りや悲しみではなく、挫折に似た失意感。今この時、初雪が降っていることなど、どうでもよかった。

「つつ」

滑って両手をコンクリートに付いた。冷めた感覚がゆっくりと私の中を浸食してゆく。無音のまま降り続ける雪が、私を沈めていく。(立ちなさい。このままだと、また深い氷の中に閉ざされてしまう)心を鳴らしても、響かない。

誰も私に手を差し伸べてくれない。誰もが私を避けるように歩いていく。・・・これが人。

(違う、)

やっと大事なことを思い出したのに、やっとここまで戻って来られたのに、やっと取り戻すことができたのに。

何もかもが冷たい。人の目も、手も、言葉も。自分の心もそれに合わせるように、冷めていく。

(Kも・・・人に対して、こんな風に感じたりしたのかな)

「君は話の分からない人だな」

「だから、ここでは扱ってないんだって」

遠くで声が聞こえる。

「これしかないですよ」

「しかし、これでは不十分なのだ」

この口調、Kに似ている。

私は冷たくなつた首を上げた。錆び付いた歯車がキリキリと音を立てるような気がした。

「君では話にならない。誰か他の者を呼んでくれ」

「そんな、勘弁して下さいよ」

声の主は、Kだった。

(行かないや・・・立って！)

私は凍りついた体を力いっぱい引き離した。

(・・・行きましょう)

自分の意思通り、ゆっくりと足を運ぶ。まるで歩き方を忘れていたみたいだ。・・・いや、その通りかもしれない。

「K」

久しぶりに聞いた自分の声。そう感じるのは、実意を正したからだろうか？・・・そう信じたい。

「織、いいところに来てくれた」

「どうしたの？」

「順を追って説明しよう。家で真理が本を読んでいた。君が買ってくれた料理の本だ。その本の87ページに掲載されているケーキを食べたそうに見ていた。だからそのケーキを作ろうと考え、買い物

に来たのだ。しかし、ここでは材料が揃わないようですね」

「真理が・・・食べたそうにしていたの？」

心に滴が落ちた。

「そうだ。推測だがね」

また一つ。

「お姉さん、この人の知り合い？」

「・・・え？ええ、そうです」

「レーズンケーキを作りたいそうなんですけど、うちで扱っているレーズンが国産じゃないから、レシピ通りに作れないって言うんですよ」

私を買った本、確か・・・「体に安心な料理の作り方」だったわけ。それで国産ってわけか。

「あ、ごめんなさい、ご迷惑お掛けしました。ここで扱っている物で構いませので、売って下さい」

「いいんですか？」

「ええ」

「織、あの本には、農薬の危険性が少ない国産のレーズンをなるべく使うようにと書いてあったぞ。真理にきちんとした食事を作るのは僕の役割だ」

いつもなら、融通の聞かない言葉に困るところなのだけれど、今は違った。滴がもう一つ、心に落ちた。

「無い物は仕方ないでしょう？また作る時までに見ましょう」

「織がそう言うのなら、そうしよう」

また一つ。

買い物を済ませた私たちは、その足で教会に向かった。

「足、大丈夫？」

「今は問題ない。が、ずっとこのままというのは問題だな」

Kは杖を突いているものの、あまり違和感なく歩き続けている。

「博士、帰って来るといいね」  
「そうだな」

戻ってくることなど有り得るのだろうか？そう思えるほど、5年  
という年月は重く感じた。

「織は？どうしてここにいる？」

「え？」

意外な質問だった。

「私は・・・真理のことを調べに来たの」

「どうやって？」

またしても、意外な質問だった。

「私の中で考えた結果、真理は施設に居たんじゃないかって思っ  
てね、この町にある施設を尋ねてみたの」

「それで？何か分かったのかい？」

「ん？・・・んん」

私はさつきから驚かされてばかりだ。

「何も分からなかった。その施設に居たのは確だけど・・・何も教  
えてもらえなかった」

「どうして？」

「・・・それが規則なんだってさ」

私は悲しい気持ちを覆い、少し砕けた言い方をした。

「規則、それを順守するのは仕方のないことだな」

「・・・？」

「どうした？」

「いえ、何でもないよ」

本当にK？

「真理の居た施設が分かった。なら、そこに帰すのか？」

「それはダメ！」

「・・・どうして？」

「それは・・・」

あそこには、人がいないから。あるのは無機質な物と者ばかりだから。

「それはね・・・真理の為に、ならないからよ」

「そうか」

あそこにおいても、真理は良くならない。きっとこのままだ。むしろ悪くなるかもしれない。

「ねえ、もし、このまま真理の帰る所が見つからなかったら、どうする？」

「・・・・・・・・・・」

Kは立ち止まった。何も言わず、立ち尽くしている。

私の望む答え。Kは言ってくれるのだろうか？

「・・・・・・・・・・」

私はKに強いられている3つの原則を思い出した。・・・それなら。

「このままあの教会に居ても構わないよね？勿論、私も一緒」

「ああ、織がそう言ったのなら、構わない」

また一つ、滴が落ちた。

Kは今、揺れているのだ。原則を守らなければならない傍らで、その原則を越えた、その先を望んでいる。私にはそう思えた。

博士はもしかしたら、強いられた原則に疑心を抱くことを望んでいたのかもしれない。原則が正しくないと考え、踏み越えようとする。それが人の心を知る、第一歩なのだと考えていたのかもしれない。

そうでなければ・・・悲しすぎる。

「帰ろう、真理の居る教会へ」

私は買い物袋を持ち替え、空いた手でKの手を取った。

「温かいね」

「摂氏20度がかい？」

「これだけ寒いと、20度はとても温かく感じるものなのよ。・・・  
それに、こうしていると、凄く落ち着く」

「そうか」

手に落ちた雪が雫に変わる。

「急ぎましよう。真理が待ってる」

「ただいま」

教会の中に言葉が木霊する。返事はない。

「真理はどこ？」

真理の姿は見当たらなかった。

「いつもの椅子で絵を描いている筈だが？」

Kが答えた途端、私は足早にその椅子を目指した。

「・・・」

真理は椅子の横になって寝息を立てていた。背もたれに隠れて見えなかっただけだ。

「大丈夫、眠っているだけみたい」

「そうか。僕は早速調理に取り掛かる。3時に間に合わせたい」

「お願いね」

Kを見送りながら、私は真理の隣に座った。

私はそつと真理の髪を撫でた。

「大丈夫よ。あなたは私たちが守るから。何があっても、必ず守るから」

私は今日あったことを噛み締めながら誓った。

精神医学を学んでも、人の心は分からない。複雑で、繊細で、黒くて、白くて。

知れば知るほど、人が怖くなる。そんな時もあった。真理は心の陰りを持っている。だからこそ、人に怯えることなく、真つ当に育つ

て欲しい。

まだまだ間に合うはずだ。この子はまだ、白いスケッチブックなのだから。

「………」

私は傍らに置いてあるスケッチブックを手に取った。

「……見せてね」

小声で呟いた後、私はスケッチブックを捲った。

捲る度に上達が窺える。

「……これは？」

最後のページに差し掛かった時だ。今までは果物や物質を描いてあったのに、人が描いてあった。

「これは……K？」

スケッチブックの右側に、Kの姿があった。

「人を……描きたいと思ったんだ」

私は堪らなく、嬉しくなった。

「ケーキができた。こっちに来てくれ」

Kの呼ぶ声。

「真理、起きて。おやつ時間よ。Kがケーキを作ってくれたのよ」

真理はゆっくりと目を開けた。そして、慌てることなく、私を見上げた。

「行きましょう」

「いただきます」

ケーキにフォークを通す。それだけでケーキのふんわりとした感覚が伝わってくる。

「……美味しい！」

「それはよかった」

「美味しいね、真理」



真理は頷きながら、大きく口を開けてケーキを頬張っている。

「お店で売っているのと変わらない味よ」

「作り方を記憶したから、これでよければいつでも作ろう」

何だか幸せな気分。

「ねえ、その服は？」

「雪で濡れたので、着替えた」

Kは上から下まで黒一色の服を着ていた。その姿はまるで……。

「まるで神父ね」

「そうなのか？」

「……そうね。そんな感じ」

窓の外は白一色で、深々と雪が降り積もっている様子が窺える。

私は静かにフオークを置いた。

「今日……泊まってもいい？」

「構わないが？」

Kは私を瞬きせずに見据えている。何か疑問を抱いているように見える。

私は目を逸らし、再び窓の外を見た。

「ちよつと、話したい事があってね」

「分かった」

私は自分の事を話したかった。彼が神父のような格好をしていたから、懺悔したくなつた訳ではない。根雪のような記憶を溶かす為に、他の誰もなく、Kに話を聞いてもらいたかった。

……どうしてだろう？

## 6・群集の心理

### 6・群集の心理

何処からともなく生まれる雪を見上げる。月も、雲も、空も無い闇。その闇に向かって、白い息が浮かんでは、吸い込まれるように消えていく。

町の明かりがポツポツと、寂しげに灯っている。明かりのある場所は家庭がある場所。この明かりの何処かに、真理の居るべき場所があるのだろうか？真理は・・・どの明かりを選ぶのだろうか？今包まれている明かりを、真理は自分の意思で選んだのだろうか？そして・・・選び続けるのだろうか？

「真理は眠ったよ」

声に振り返ると、絵本を持ったKの姿があつた。「月と懐中時計」私も持つている絵本だ。

「本、読んであげたの？」

「この本はもう何度も読んであげたよ。話の内容も展開も知っている筈なのに、どうしてまた聞きたがるのか、僕には分からない」

私は少し笑いながら窓を閉めた。

「それは私にも分からない。人つてほんと、不思議よね」

「織がそう言つと、より分からなくなる」

そう言いながら、Kは絵本をテーブルに置いた。

「理屈に合わないことをするのが人なのよ。私から見れば、あなただって十分理屈に合わないことをしていると思うけど？」

Kは、何も答えなかった。

「真理はね、あなたのことが好きみたい。よく懐いている」

「織は前にもそう言っていた」

「その時Kは、「僕がロボットだから？」って私に聞いた」

「そうだ」

「子供には、あなたがロボットかどうかなんて分からないよ」

「今はそうかもしれない。しかし、いつか理解できるときが来る。

その時、真理は・・・僕のことを、どう思うだろうか？」

滲んでぼやけていて、その奥に潜む深い何かがある。Kはそんな瞳をしている。私にはそう見えた。

「・・・怖いのか？」

「・・・分からない」

Kの中で、何かが生まれては消えている。何かとは、感情のことだ。

Kはロボットだけど、完全な無じゃない。常に無と有の間を揺らいでいる。それはきつと、生まれ、芽生え、実り、その過程に結びつくだろう。

「織の話したい事とは？」

「ん？・・・ん・・・」

私は顔を小さく上げた。そしてそのことを思い出し、また少し俯いた。

「私の昔話、聞きたい？」

そう問うと、Kは温かいコーヒーを入れたカップをテーブルに置いた。

「ありがとう」

「博士は話をする時、片手にいつもそのカップを持っていた」

私は静かに席に着いて、両手でカップを握り、深く息を吸った。

カップの温かさが手に伝わり、根雪に届く。

「私は今年の夏まで、ここから遠く離れた都会で精神科医をしていたの。分からないと思うけど、女が一人社会で生きていくのはとても大変なのよ。医学の世界もその例外じゃない。とても風当たりが強かった。だから私は必死に仕事をしていた。女だからって見下さ

れたくなかったし、私はどうしてもこの世界で生き残りたかった。繰り返される多忙の中、私は今年の5月に、ある患者の担当になった。と言うか・・・押し付けられた、かな」

軽く触れただけで溢れる言葉。止め処なくなりそうな感覚。今ハツキリと分かった。私は、喋りたかったのだ。心の陰りを。精神科の人間でなければ・・・とづくにそうしていただろうな。

「その患者の名前は「清楚しんぷ 真理まじ」9才の、女の子」

・・・

「今日はどうしてここに来たのか、教えてくれるかな？」

「ここは悩みを相談する場所なんですよ？」

「まあ、そうでもあるわね。何か悩み事でもあるの？」

「・・・はい」

「どんなことかな？教えてくれる？」

「当ててみて」

私は目の前の少女に、少しだけ疎ましさを感じた。でも、これも仕事だからと思って、表情を曇らせなかった。

「じゃあ目を瞑って、両手を私に向かって差し出して」

真理は何も言わず、少し鼻で笑いながら言う通りにした。

私は両手を軽く握った。そして、親指で軽く服の袖を上げた。

(左手に一筋の躊躇い傷。傷は少し前のもので、薄っすらと瘡蓋が残っている。それに、前髪が少し不揃いね。髪の毛の切り口から見て、右利きの人が切ったようね。この子は左利きだから・・・)

「はい、もう目を開けていいわよ」

「もう分かったの？」

真理はケラケラと笑いながら言った。

「真理ちゃんももしかして、学校でいじめられているのかな？」

「正解。凄いね、傷一つでそこまで推測できるんだあ」

いじめられているとは思えないほど、明るい口調だった。これなら大きな問題でもない。簡単な仕事になるだろう。私はこの時、そう思った。

「いじめがなくなるように、一緒に頑張りましょうね」

「はい、よろしく願います」

「これから何度か、ここに通ってもらうことになるから、今日はまず、お互いのことを知りましょうか」

「じゃあ私から。先生の趣味は？」

あまりの活発さに、私は少し気圧された。

「コントラバスっていう楽器を弾くことよ」

「オーケストラをやったことがあるの？」

「あるわよ。ほんの少しだけだけど」

「楽しかった？」

「ええ、みんなで一つのものを表現する。とても素晴らしいことよ」

「世界の調和・・・確かに面白そうかも」

・・・？

「ん。じゃあ次は私の番。真理ちゃんの趣味は？」

「本を読むことです」

「どんな本が好きなの？」

「辞書全般。あとは論文とか」

「ええ？そんなの読めるの？」

「読めるよ。お母さんが、語学と読解力は人生の要だからって教えてくれたから、もうずっと読み続けているよ」

「・・・そう、なんだ」

随分と変わった子。私はそうとしか考えなかった。治療とは大きく関わらないだろう。むしろ、有利に進む。私はそう考えた。

「失礼します。綾生子先生、相馬さんがお見えになっています」

「少し待ってもらって」

「先生、私ならもういいですよ。また来ますから、続きはその時で」

「・・・そう？」

「はい。またね、先生」

そう言つと、真理は速やかに部屋を出て行つた。

誰も居なくなつた部屋で、私は真理のカルテに目を通した。

知能は・・・極めて高い、か。いじめの原因はそこかも。

(その日を境に、真理は通院を始めた。でも思っていたほど、治療は進まなかつた。どうしてかと言つと、治療の時間の半分は真理の話聞くようになっていたから)

「・・・だから、動いている時計は、止まっている時計よりもゆつくりと時が過ぎるんだつて。ね、ね、面白いでしょ？先生」

「そうね、確かに興味深いわね。けど・・・難しすぎない？」

「そうかなあ。有りのままをそのまま受け入れればいいんだよ」  
それが出来るのは子供だから、かな。

「あ、もう時間だね。先生ごめんなさい、私ばかり話しちゃつて」  
「いいのよ、あなたのことを知るのも大切なことだからね」

「楽しかつたよ。でも今度は先生の話を聞くな」

「はい。それじゃまた今度ね」

(頭がいいのは最初から分かっていたけど、話を聞くに連れて・・・どこか異質な感じが強まっていった。心の奥底で一体何を考えているのか、この時の私には、全く掴めなかつた)

「綾生子先生、次の相馬さんですが、15分ほど遅れるそうです」

「そう。分かつたわ」

「コーヒーでも入れますか？」

「そうね。お願いするわ」

私は椅子の背もたれに深く体を沈めながら、大きく息を吐き出した。

「真理ちゃん、今日は何の話をしていたんですか？」

「・・・光の話」

「ええ？」

「相対性理論よ」

「ほええ・・・また随分と飛躍した話ですね・・・はい、どうぞ」

「ありがとう」

私は両手を暖めるようにカップを受け取った。

「真理ちゃんは、本当の友達がつかれないのかもしれない」

「その、いじめられているからですか？」

「そう。正確には、その原因」

「原因・・・？」

「ほら、子供って、同じ物を持っていてる子に強い親近感を抱くでしょ。おもちゃとか、ゲームとか、お菓子の景品とか」

「ああ、確かにそうですね。私も子供の頃、同じ人形を持ってないからって、遊びに混ぜてもらえなかったことがありましたね。だから「みんな持っているから」って言ってお母さんに買ってもらいました。他にも、昨日のテレビアニメを見なかったからって、話に混ざれなかったりとか」

「そう、それなのよ。真理ちゃんの場合、学んだ知識を共有できる子がいないのよ。だから同級生に壁を作るのかもしれない」

「なるほど」

「だからここで、大人相手に楽しそうに話をするのよ」

「じゃあ先生は友達のような感じですか？」

「真理ちゃんからすれば、そう感じているかもね。知能は大人並でも、精神は子供だからね」

「精神の天才ではない。ですか」

「微妙な言い方ね」

「すみません」

(いじめの原因なんて、ほんの些細なことだったりするの。周りと

は少し違う。同じ価値観を持ってなかったり、生まれ持った体質だったりとかね。全く原因のない場合だってある)

(理解できないな)

(私も・・・そう思う)

「真理ちゃん、学校ではどんな遊びが流行っているの?」

「知らない。ずっと本を読んでいるから」

「遊びに誘われたりしないの?」

「誘われないよ。誰も私に話しかけてこないから」

「・・・そうなんだ」

真理は椅子に座り、足を前後に揺らしながら淡々と話している。

「いじめられているって話だけど、どんなことをされたのかな?」

「私の本を焼却炉に捨てられたりとか、教科書に落書きされたりと

か・・・」

「・・・他には?叩かれたりはしないの?」

「あるよ。髪を切られたり、靴を盗まれたりもした。左手の傷だっ

てそうだよ」

いつも物静かな真理の口調が、段々と荒く、息巻いていくのが分かった。

「もしかしたら先生は、私が自分で傷つけたかと思っっているかもしれないけど、あれはね、カッターで切られたんだよ。床に転ばされて、何人も私の上に乗っかってきて、」

真理がずっと隠そうとしていた感情が瞳に映りだした。・・・これは恐怖?いや、それだけじゃない。もっと、黒い、今にも全身を染めてしまいそうな、

「手も強く押さえられて、それからカッターで左手を、」

「ごめんね、辛い話をさせて」

私は真理の話に割って入った。

「今日はまだ時間があるから、真理ちゃんの好きな話を聞かせて」

「・・・いいの?」



「ええ、勿論よ」

そう言つと、冷たくなつていた真理の唇が緩やかに解けていった。「じゃあね、この前話した相対性理論の続きだけど、」

真理の瞳に映っていた、黒い何か、は次第に姿を消していった。

私は真理の話に相槌を打ちながら、自分を落ち着かせるようにゆつくりと息を吐いた。

「・・・だからね、相対性理論の方程式を解くと、ある場合には時間がループしている答えも存在するんだよ。だからね、ずっとずっと未来に行くと、いずれは過去に到着するんだよ」

考えていたよりもずっと深刻な問題のようだ。もっと急がなければいけない。

「・・・ビックバンは今でも膨張を続けていて、宇宙は広がり続けている。最大まで広がりきると、今度は縮小を始める。そうなると時間は逆行を始めるんだつて。死んだ人も生き返つて時間を逆行するんだよ」

もっと急がなければ、取り返しのつかないことになるかもしれない。真理も、真理をいじめている子も。

「そして最小限まで縮小したら、今度はまた膨張を始める。本当の意味で歴史は繰り返されることになるんだよ」

(この時の私は、事態の重さを深刻に受け止め直していた。だから・・・真理の話を真剣に聞こうとしなかった。これが・・・私の一番の過ちだった)

(どうして?)

(・・・続きを聞けば、分かるわ。・・・それから1ヶ月くらい後かな、真理は心理学に興味を持つようになったの)

「先生、いじめをする人つてどんな心理を持っているの?」

「ん?・・・そうねえ、まず、あまりいじめているって自覚はなかったりすることが多いと思うわね」

「そうなの？」

「いじめている方は、からかっているだけ、とか、ふざけているだけ、としか思っていなかったりして、いじめられている側とは感じ方が食い違っていたりすることは多々あるわね」

「それって・・・酷いよ。クラス全員がそう思っているの？」

「それは違うわ。逆らえなくて、仕方なく従っている子も多いはずよ。自分だけその輪から外れたら、今度は自分がいじめられる。みんなそれが怖いのよ」

「でも・・・笑いながらいじめてくる子だって沢山いるよ」

「それは絶対に間違っている。正しいはずがない。・・・みんな反省力をなくしているのよ」

私は真理の両肩に手を当てながら言った。

「やっぱり・・・これは群集の心理」

「真理は小さくポツリと呟いた。

「・・・また難しい言葉を覚えたのね」

「先生とお話していたら心理学に興味が沸いちゃって」

「真理はにっこり笑いながら言った。

（私自身、この真理の笑顔に救われていた。何の解決策も見出せず、困惑していたから）

「先生、私ね、いじめをしてくる人達のリーダー格の人と話してみようと考えてる」

「どうして？」

「みんながその人に従っているのなら、結局は1対1なのかな？と  
思ってる」

「悪くないかもしれない。むしろ、一番の方法かもしれない。

「そうね、いい方法かもしれない」

「でしょ！私はどうにかしなければ、いじめはなくならないもんね」  
「私は心が震えた。

「強いね・・・本当に強いね。凄い勇氣よ」

「そう?」

「そうよ」

私達は、二人で笑った。

「でも無茶しちゃダメよ?もし何かされたら、すぐ先生に言ってね」  
「うん、分かってるよ」

(本当に心の強い子だった。私よりもずっと、強い子だった。・・・ただそう感じるだけで、その強さの陰りの部分に、私は全く気が付かなかった)

(それから数日後、学校でのいじめはなくなった)

「少し、休ませて」

「分かった。コーヒー、温かいのに入れ直そう」

「ありがとう、お願いするわ」

深い氷に覆われた心理が、少しずつ姿を現してくるのが分かる。

最後の一言まで、私は辿り着くことが出来るのだろうか?

私は両手を合わせて、祈るように握り締め、額へ運んだ。

「織、真理が目を覚ましてしまった。すまないが、少し待ってくれ」

「・・・え?」

視線を声のする方向に向けると、虚ろな瞳をした、パジャマ姿の真理が目を擦っていた。真理を見た瞬間、私の、心の中の真理と姿が重なった。

「・・・」

私の不安な眼差しが、真理の瞳と交差した。すると、真理に私の心理が駆け抜けたのか、真理は大きく瞳を見開いて、Kにすぎる様に抱きついた。

「あつ、」

膨張する鼓動が私の言葉を遮った。

「織、どうかしたのか?」

「いえ、私は、大丈夫、だから、」

まるで涙を堪えている声で、私は答えた。

「・・・そうか」

真理はKの服を小さく何度も引っ張っている。

(怖がらないで・・・私に・・・怯えないで)

「真理・・・織が心配なんだな？」

Kがそう言くと・・・真理は大きく、ゆっくりと頷いた。

(・・・真理・・・)

私の胸は震え、痛くなった。

「そうか。でも織なら大丈夫だ。だから寝室に行こう」

Kはそう言くと、真理の手を取り、静かに歩き出した。

「真理・・・ごめんね・・・。私のことを、心配してくれたんだね」  
硬直している両手から、自然と力が抜けていくのが分かる。私は  
ゆっくりと両手を解き、目の前で開いた。

何もない手。

そう・・・何もない手。

## 7・慟哭を包む喉頭

### 7・慟哭を包む喉頭

「待たせたね。真理は再び眠りに着いた」

「そう・・・不安そうじゃなかった？」

「君のことを案じているように見えたので、織なら大丈夫だ、と言いつづけた」

「・・・そっか。・・・ありがとう」

Kは、変わってきている。この生活が実を結んでいるのだと思える。

その姿が・・・とても勇ましかった。

私も、変わるはずだ。そう望んで、挑めばいい。

「話の続き、始めようか。真理がどうやっていじめを解決したのか」

「解決した？一体、どうやって？こんな短期間に？だって、昨日の今日でしょ？」

「そんなに驚かないでよ、先生。ちゃんと説明するから」

あつげらんとしていいる私とは反対に、首を左右に揺らしながら、落ち着いた様子で真理。

「私がやったのは単純なこと。クラスのみんなから群集の心理を切り離れたの」

「簡単って・・・どうやって？」

「それはね・・・」

(いじめをやってくるリーダー格の子に、授業中に話しかけたんだよ。おもむろに席を立って、その子の席まで行って・・・)

「ねえ、どうして私に毎日毎日酷いことをするの?」

「な、何よ、いきなり・・・授業中でしょ」

「答えになってないよ。どうして私をいじめるの、って聞いているんだけど」

(私が冷めた目で見下ろしながらそう言ったら、その子は酷く動揺していたよ)

「どうして黙っているの?私に気が入らないの?何処に気が入らない?」

(そこまで言ったら、教室中が冷たくざわついてきてね)

「清楚、今何て言った?お前、いじめられているのか?」

「先生は黙って聞いていて下さい」

(少し強い口調でそう言ったら、その子、ふふ、顔が青ざめてきてさあ)

「今日は静かだね。いつもみたいに私の悪口は言わないの?新しい教科書買ったけど、焼却炉に燃やしに行かなくていいの?」

「おい、二人ともどういうことだ?答えなさい」

「違、違う・・・私、そんなこと」

「したじゃない。ポケットにいつもカッターを持ってきて、私の髪を切ったりしたじゃない」

「本当か!」

「ち、違い、ます」

「ならポケットの中、全部出してみてよ」

(そうしたらね、今にも泣き出しそうな位に顔が歪んじやってね)

「どうしたの？違うんでしょ？なら潔白を証明したらいいじゃない」  
「……出しなさい」

（その子はポケットからハンカチを取り出したの。私がハンカチを持ち上げたら、カッターが転げ落ちてね、）

「もつと上手に隠したら？それに、刃が錆びているよ？私の血が付いたからかな？」

「血？清楚、カッターで切られたのか？」

「はい、でももう大丈夫です。……ほら、もう殆ど瘡蓋も残っていないですから」

「お前……何てことしたんだ！」

（先生が怒鳴ったら、その子は机に伏せちゃってね、）

「ねえ、リーダーが困っているよ？みんな助けなくていいの？いつもみたいに手を貸してあげたら？」

（誰も私と目を合わせようとしなかった。下向いたり、窓の外見ていたり、泣いている子もいたっけ）

「みんな関係ないって顔してないでさ、仲間なんだから、助け合わなきゃ」

「みんな、正直に言え！清楚をいじめたやつはいるのか？」

（勿論、みんな何も言わない。鳴き声しか聞こえなかった）

「誰も助けてくれないね。一人じゃ何にも出来ないんだね」

「……」

「そんなに泣かないでよ。顔を上げて。私、もう怒ってないよ」

(その子はゆっくりと顔を上げたの。目が真っ赤になっていて、すぐる様に細めていた)

「どうしたの？そんなに怯えて……。私が怖い？」

(そう言ったら、大声で泣き出しちゃった)

「ちょっとやり過ぎたかも。でもいいよね？今まで散々やりたい放題だったし」

真理は笑いを堪えながらそう言った。

「随分と……。強引な方法を選んだのね」

「でも上手く行ったよ」

「それは……。そうかもしれないけど」

「？」

(この時の私は……。正直、真理に恐怖を感じていたの)  
(どうして?)

(人なら誰もが持っている仮面、ペルソナを剥がし、その後ろに隠れている認めたくない劣等感、シャドーを引っ張り出す。心を壊す残酷な方法を簡単にやってのけたからよ。いじめていた子が気の毒に思えるほどの手際でね。私は真理に対する恐怖心を瞳に映さないよう必死だった)

「とにかく、いじめは解決したのね？」

「はい。もう大丈夫だと思います。リーダーの子は学校に来なくなっちゃったけど」

「え？……。そう、なの？」



「うん」

「他の子は？」

「ちゃんと学校に来ているよ。みんな泣きながら私に謝ってきた」

「・・・そう」

(その時私は、妙な胸騒ぎを感じた)

「報告は以上です。もう帰るね」

「あ、待って」

「何ですか？」

「また・・・ここに来てね」

「解決したからもう大丈夫だよ、先生」

「でも、」

「大丈夫だよ、先生。またいつか、会えるから」

「あ・・・ん」

(私はそれ以上引き止めなかった。もうしばらく、時間が経ったら連絡してみようと思ってるね)

「私は真理に、危うさを感じていたの。ううん、違う。言葉を選ばなければ、危険な子、そう感じていた」

「どうして？」

「残酷なことを成功させてしまったからよ。いじめをなくす為とはいえ、クラスを恐怖で支配した。結果、リーダーの子は不登校になつてしまった。だからよ」

「・・・」

「あの賢さが・・・悪い方向へ進まないよう、巧く導かなければ。そう考えていた。でも遅かった」

「・・・何かあったのかい？」

「ええ・・・」

私は何度も深呼吸をした。何度も何度も。頭の中が真っ白になる位に、繰り返した。そして私は、こう書き込んだ。

（自分をコントロールして。乱れぬよう、対峙しなさい。出来るよね？）

私は小さく頷いた。

「真理が診療所に報告に来た、その次の日よ。真理は、学校の、自分のクラスで・・・自殺をしたの」

全身が粟立ち、宙に浮いた様な感覚が駆け巡った。体が揺れ、私は堪らなくテーブルに手を付いた。

「何故そんなことに？問題は解決したのだろうか？」

「・・・私も、すぐには理解できなかった。自宅に連絡をしたけど、一度も繋がらなかった」

挫く心を私はゆっくりと押し出した。

「数日後、お通夜の案内が届いた。私は混乱の最中、その場へ赴いたの」

「学校でいじめられていたんだって？」

「自殺の原因って・・・それかしら」

「まだ9歳なのに・・・」

香典を納める列に並んでいる時だ。様々な哀れみが飛び交っていた。否が応でも耳に入ってくる。

「こうなる前に、どうにかできなかったのかねえ・・・」

「今の教育現場は狂っている」

全ての言葉が、私に向けられているような気がした。

後ろからすすり泣く声が聞こえた。そっと目を向けると、学校の

担任と、クラスメートと思われる子供達が列に並んでいた。

皆が小さな声でヒソヒソと話し始める。私は担任に挨拶をしよう  
と思い、列を抜け、足を運んだ。

「すみません、真理ちゃんを担当、」

私が話しかけた瞬間、誰かが私を押しつけて担任に掴みかかった。  
「真理はいじめにあっていました。こんな結果になる前に、どうに  
か出来なかったんですか！」

掴みかかったのは真理のお母さんだった。

「どうして・・・こんなことに・・・」

お母さんはその場に泣き崩れた。

先生は涙を拭った後、何も言わず、何も言えず、ただ深々と頭を  
下げた。

「・・・」

（私は何も言えず、ただ困惑していた。その最中、生徒達に目を向  
けると、異様な感覚に気が付いた。泣いている子。髪を掻き毟って  
いる子。恐怖で呼吸が止まりそうな子。様々だった。でも共通して  
いることがあった。それは、全員の心が挫けている事、だった。私  
はすぐに気が付いた。担任を含め、クラスメート全員が、強迫神経  
症にかかっている）

「・・・生、先生」

「・・・え？」

ハッと我に返ると、真理のお母さんが目に映った。

「先生に・・・聞きたいことがあります」

私はお母さんに気圧された。何故なら、涙で滲んだ瞳の奥に、憎  
しみが映っていたからだ。

「あ・・・はい」

「・・・真理の部屋から手紙が出てきました。先生宛です。先ずは、  
・・・これを読んで下さい」

渡された手紙。子供が好むような可愛い絵柄の物。でもその  
手紙はくしゃくしゃで、誰かの爪痕が見られた。・・・間違いなく、

お母さんのだろう。

私は不安に苛まれながら、手紙を開いた。

誰も私の話を聞いてくれない。理解してくれない。クラスメートは楽しそうに、毎日、毎日、毎日、毎日、玩具の様に私を扱う。まるで小さな世界の間引きのように思えます。

でも先生だけは違った。私の話を聞いてくれたし、理解しようとしてくれた。そういうの、初めてだったから嬉しかったよ。

でももう我慢できない。先生と話せなくなるのは残念だけど、私は今回の命を復讐に使います。私を払い物にした人全員に、死ぬまで消えない傷を付けて、蝕んでやると決めました。

先生。もう一度命が廻ってきたら、また私の話を聞いて下さい。

「復讐って・・・何ですか？」

「・・・」

「いじめは解決したはずでしょ？」

「・・・」

「先生？手紙に書かれた意味、分かるんでしょ？」

「いえ・・・私には、」

（嘘だ。私は理解できた。自殺することが復讐そのものなのだ）

（どうということだい？）

（真理は・・・自分でいじめを解決した。そうすることで、加担していた者全員に、反省を促した。皆が、悪いことをした、酷いことをした、そう考えたところで、自分の命を絶った。そうすることで、いじめをしていた子供達は、自分が殺したと思う。人を殺したという強烈な自責の念は、子供の精神力では太刀打ちできない。手紙に書いてあった通り、一生消えない深い傷を、心に刻ませた。子供達

全員に現れていた強迫神経症は、復讐の成功を表していると言えるでしょうね)

「先生なら、こうなる前に、どうにか出来たんじゃないですか？」

「私は・・・全力で・・・」

「救うことのできる命だったんじゃないですか？」

「私は・・・そのつもりで・・・」

「ひょっとして、こうなるって分かっていたんじゃないですか？」

「知らない、私は・・・何も、」

お母さんの荒い声とは対象に、私の声は誰にも聞こえないほど、小さかった。

喉が熱く、目の奥が痛い。

「どうして・・・こんなことに・・・」

お母さんは再びその場に泣き崩れた。掠れた鳴き声がその場に響き渡り、悲しみで覆われた。

その場にいた全員の視線が私に向けられた。鋭く尖った視線が、あらゆる方向から私を切り刻む。

「あ・・・は・・・は・・・あ・・・」

突然、私は呼吸の仕方を忘れた。

小さな話し声が、全て私への罵声に聞こえる。ありもしない幻聴が、私の聴覚を支配していく。

耳を閉じようにも、腕が動かない。

「自分を・・・コントロールして！」

そう言い聞かせ、私は固く閉ざされた拳へと視線を運んだ。自分の意に反し、頑なに硬直を続ける指を、少しずつ解いていく。

「・・・これが・・・私の、手？」

食い込んだ爪が、私の手を紅に染めていた。怨念のように湧き上がる血が、私を沈めていく。

「私も・・・復讐の・・・対象なの？」

指の隙間から零れる紅い雫が、私の足元に飛び散った。

「それからすぐ、私は逃げ出した。そしてここに流れ着いた」  
「これが、私の罪。」

「・・・痛いのかい？」  
「え？」

私は手を開いた。あの時の爪痕はすっかりなくなっている。いや、なくなつたと言つよりは、埋め込まれた。そんな気がする。

「ううん、もう、痛くない」

「いや、手じゃなくて・・・ここ」

Kは胸に手を当てた。

「話している時、何度もここを押さえたり、撫でたりしていた」  
私は誘われるように胸に手を当てた。

「・・・痛いよ。心が痛くて、何度も悲鳴を上げている」  
ずっと続く痛み。晴れることのない、暗闇の雲。

そう思うと、また心が悲鳴を上げた。

「救うことができた命なのに・・・救うどころか、摘み取ってしま  
うなんて・・・」

「本当に救うことが出来たのかい？」

「分からない、分からないけど・・・私は知っていた。真理の、  
生と死に対する価値観が曖昧だつたってことを」

「生と死の価値観？」

「真理はね、人生は一度きりじゃないと考えていたの。真理が話し  
ていた科学の話には、時間がループしているとか、時間が逆行する  
とか、そんな説が何度も出ていた。その可能性を知る度に、真理は  
生と死の価値観が揺らいでいったのだと思う」

「それは本人にしか分からないさ」

「そうね。けど、それを知らなければいけないのが、精神科医なの。  
もっとよく話を聞いて、理解しようとしていれば・・・違う対応が

できたのに……。私は目の前の問題にばかり目が向いていた。うん、いじめだってそう、私は何もしてやれなかった」

荒れる心が、あの時のシーンを映し出した。

私を切り刻む、冷たい視線。

私を攻める、多くの罵声。

焼けるように熱い喉、奪われる呼吸。

（いっそ壊れてしまいたい。誰か、私を、）

「・・・K？」

「こうすれば、落ち着くのだろう？」

Kの手が、私の手を包んだ。

「うつ・・・あつ・・・」

私は堪えきれず、泣き出した。

一度溢れたら止まらない。声の無い心を物語るように次々零れてくる。

私は空っぽになるまで、夜通し、大声で泣き続けた。

Kは、ずっと私の手を放さなかった。

## 8・触る指

### 8・触る指

眩しく、鋭い陽射しを瞼の向こうに感じる。

「・・・初めて、かも」

私は瞼を閉じたまま目覚めた。

そのまま上半身を起こすと、屢気楼のように体が揺らめいた。心地いいのだが、バランスを取るのが難しい。

両手で顔を覆い、ゆっくりと目を開ける。指の隙間から差し込む光に逆らうように、ゆっくりと、ゆっくりと目を開ける。

「ここは、天国？」

そう思えるほどに、光に満ちていた。

顔を覆っていた手を滑らせ、世界を露にする。全てが光に覆われ、少しずつ、退いていく。

「・・・眩しいわけね」

窓の外には深々と雪が積もっていた。晴れ渡った空からの光が雪に反射して、冬の雅を彩っていた。

「いつの間に？」

そう呟きながら椅子から立ち上がると、毛布が私から滑り落ちた。「っつ」

私は素早く毛布を両手で掴んだ。

「K?・・・だよね」

ふと私は、真理に自分のコートを掛けてあげたことを思い出した。「・・・」

「もう起きたのかい？」

Kの声だ。

「え?・・・うん」

私はにんまりしたまま答えた。



「今、何時？」

「8時5分、朝食の時間だ。用意できているから済ませよう」  
私は大きく頷いた。

「あそうだ、K」

「・・・何だ？」

「毛布、ありがとう」

私は自分を包んでいた毛布を広げ、お礼を言った。

「・・・ああ」

そう答えると、Kはそそくさとその場から立ち去った。

「ああ・・・だって」

私は再び毛布で自分をくるみ、クスクスと笑った。答え方や立ち去り方が、何となく可愛かったからだ。

どこかぶつきらぼうな・・・そう、弟のような感じだ。

私は毛布をたたみ、椅子の上に置いた後、洗面所へと移動した。

蛇口を捻り、お湯になるのを待ちながら、鏡を覗く。はれぼったい瞳が、昨夜を物語っていた。

「結構・・・スッキリしたなあ」

私は今まで、誰かに愚痴ってしまったら楽になるとは思っていなかった。そうしたところで、問題が解決するわけではないからだ。今だってそうだ。過去と決別できたわけじゃない。だけど・・・確かに、胸が軽い。

（失敗から成功を学べる織には、その可能性がある。そういうことなのだろうか？）

私が教えたことを、Kはそれ以上の意味で還してくれた。

「真理・・・」

私は二人の名を呼んだ。

「がんばれ、私。賽はもう投げられているんだから  
私は曇り始めた鏡にそう告げた。」

「メニューは？」

「トーストと、卵とベーコン、それからチーズの盛り合わせだ」  
「質素ね」

「どついう意味だい？」

「健康的ってこと」

私は椅子を引いて、テーブルに付いた。

「いただきます」

「？」

手を合わせてそう言うと、Kはほんの少しだけ不思議そうな顔を  
した。・・・ように見えた。

トーストを手に取り、その上に適当にチーズを乗せ、フォークで  
塗り潰す。その様子を見ていた真理は私の真似をし始めた。

「そうすると美味しいのかい？」

「私は美味しいと思うけど？」

少し、意地の悪い答え方だ。

次にKは真理の顔を窺い始めた。いや、顔じゃなく、表情だ。

「・・・真理ちゃん、美味しい？」

真理は口を動かしながら頷いた。子供は正直だ。

「織、一つ聞きたいことがある」

「何？」

「クリスマスでは、何故家族に贈り物をするのだ？」

「何故・・・って・・・うん」

真理がいる手前、私はどう言えばいいのか分からなかった。

「クリスマスとは、キリストの降誕祭。つまりは、キリストという  
人物の誕生日なのだろう？」

「・・・そうね」

「全員がその人の誕生日を祝うとは、キリストとは一体何者なのか？キャロルという賛美歌まである位だ、よほどの人物なのかい？」  
物事を難しく考えるのがKの悪いところだ。いや、正直なところか。

「キリストは、愛を根本主義として、」  
（魂の救いを得ようとする教えを・・・そう言ったら、やぶへびになるか）

「世界を平和にしようとした人なの。愛があれば争いは生まれなからね。家族に贈り物をするのも愛情があるからなのよ」

上手くまとまった。

「なるほど。では、愛とは何だ？」

「それは・・・」

私は真理に視線を向けた。

「それは・・・いつか分かる日が来るよ。言葉で習わなくてもね」  
それを教えるのは、きつと、私じゃない。私の胸に、そんな期待が生まれた。

「何処で憶えたの？クリスマスとか、キリストとか」

「聖者の贈り物、という絵本だ」

「ああ・・・あれね」

私も持っている絵本だ。貧しい家族に、聖者が毎年クリスマスプレゼントとして、その家族に四季折々の苗木を贈る話だ。

「クリスマスかあ・・・」

もうそんな時期か。

「K、食事が済んだら買い物に行こうか」

「構わないが、何を買うに行くのだ？」

「勿論、クリスマスの準備品」

ツリーに、ケーキの予約に、七面鳥。それからやっぱり、プレゼントとクリスマスカード。

「何だかワクワクしてきたね」

こんな気持ちは久しぶりだ。ずっとこんな気持ちを持つことは、許されないと思っていた。でもきつと、それは間違いなのだろう。

「ワクワクク？」

「そう、ワクワクク」

この3人での生活の中で、Kがほんの少しでも心を学ぶことが出来たのなら……。Kは一体、真理にどんなプレゼントを選ぶのだろうか？

「ご馳走様」

扉を開けると、外は銀世界だった。思わず目を細めてしまう程に輝いている。

「歩きにくそうだね」

私はちらりとKの杖に目を向けた。

「おそらく、問題無い」

Kは足元の感触を確かめながら外へと踏み出した。

「一緒に、行かないかい？」

Kがそう言っただけで真理を誘った。私は正直、驚いてしまった。

「そうよ！一緒に行きましょう」

二人の誘いに、真理はゆっくりとドアに歩み寄った。

（頑張っ）

真理はここへ来てから、一步も外へ出ていない。言っただけで、町から隔離されたこの場所に、閉じこもったままなのだ。引きこもりと変わらない。このままでいい筈が無い。

（もう少しよ）

あと一步のところまで、真理の足が止まってしまった。

（ほら、頑張っ）

何度も前のめりになるのだが、あと一步が踏み出せない。

（……………）

不安に駆られ、次第に真理の表情が歪んでいく。握る手に力が入

り、小刻みに震えている。

(・・・)

真理はその場に座り込んでしまった。涙を堪えるように大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐いている。しかし、その我慢もたつたひと時で、堪えきれずに涙をポロポロと零した。

私は真理に駆け寄り、力いっぱい抱きしめた。

「いいのよ。よく頑張ったわ」

ユラユラと揺れながら、真理の耳元でそう呟くと、真理は私の胸に強く顔を沈め、声を殺して泣き続けた。

「すまないが、僕はここに残ることにする」

「ええ、真理の側にいてあげて」

Kは頷いて私達のところへ歩き出した。が、バランスを崩して倒れてしまった。

「ちよ、ちよつと大丈夫？」

「大丈夫だ」

「足、悪くなつたんじゃないの？」

「以前より、バランスが取り辛くなった」

「もう・・・無理しないでよ」

「ああ、二人で君の帰りを待っている。今日もここに帰って来るの  
だろう？」

「え？」

私は、驚いてばかりだ。

「うん。勿論、そうよ」

「ここが・・・私の・・・帰る場所。」

「私は買い物に行ってくるから、二人はここで留守番しててね」

真理の耳元でそう囁くと、真理はしっかりと頷いた。

「じゃあ、夕方前には戻るから」

「ああ、頼む」

真理の、外に出なければという強い気持ちは、この上ない形で私に伝わった。怯えるだけだった少し前とは大きく違う。その気持ちを、私がもつと育まなければいけない。

(勿論、出来るよね?)

心の問いかけは、ストンと胸に収まった。

私も変わったのだろう。以前より、前向きになれた気がする。きっと、心が軽くなったからだ。間違いなく二人のおかげだ。

二人の顔が、心に浮かぶ。

(二人で君の帰りを待っている)

(今日もここに帰って来るのだろうか?)

今思い出しても、胸がジーンと熱くなる。

帰れる場所。待っている人。心に浮かぶ人。これらがあつて初めて、寂しいという感情が生まれるのかもしれない。ここに来た頃は、全く抱かなかつた心だ。

私は今、二人のおかげで、胸いっぱいです。

「ん？」

町の派出所を通りかかった時だ。一枚の張り紙に目が向いた。

「火の用心。最近放火が続いています。季節柄、火の手が回りやすいので、十分な注意と備えを心がけて下さい。かあ」

そう言えば、ここに来た頃から放火がずっと続いている。

「ご協力、お願いしますね」

一人の若い警官が、張り紙を見ている私に話しかけた。

「はい。犯人はまだ捕まらないのですか？」

「ええ。……すみません」

「段々エスカレートしているようですね。罪の意識にも慣れて、ためらいがなくなっているようですから、これからも続くと思いますよ」

「何故、そう思うのですか？」

「死者が出たにも拘らず、犯行が続いているからです。手口も段々

「巧妙になつてきていますしね」

「あの・・・失礼ですが、どんな職業をされているのですか？」

「精神科医です。元ですけど」

「なるほど・・・それで・・・あの、犯人像とか、分かりますか？」

「新聞で読んだ情報だけでは何とも言えませんね。ただ・・・意外と若い人だと思います。例えば、学生とか」

「素晴らしい！あの、もしよろしければ、ご協力願えませんか？」

「専門の人が署にいるのでしょうか？」

「いえ、見ての通り小さな町ですから、そのような専門の人はいないですよ。ご協力をお願いします！」

「ん・・・」

「話を聞いてもらうだけでも結構です。何か助言を頂ければ、それで十分です」

「勇ましい若者の熱意が、十分に伝わってくる。自分の力が、いや、特性が役に立つのなら・・・」

「分かりました。協力させて下さい」

「ありがとうございます！どうぞこちらへ」

「こういう人の救い方もあるのだろう。」

小1時間位かな？と思ったのは大間違いだった。町の地図や野次馬の写真は勿論、現場の見取り図に建物の設計図まで目を通した。そして分析。犯人はやっぱリエスカレートの一途を辿っている。見え隠れしていた凶暴性が、衝動によって姿を現してきている。これはすなわち、これからも犯行が続くことを示唆している。結果。手持ちの情報だけでは犯人を特定することは出来なかった。より一層の注意が必要ということと、町の住人たちの強い団結が必要であるとした、私は言えなかった。

「すみません、あまり協力できませんでしたね」

「いえいえ、とても参考になりましたよ」

「また協力させて下さい」

私はそう言ってコートのポケットに手を入れた。

（あ、そうだ。携帯はゴミ箱に捨てたんだっけ）

「ええ、よろしくお願ひします」

辺りは夕闇に染まっていた。

「もうこんな時間かあ」

私は、夕方前には戻るという約束を思い出し、急いで買い物を買わせることにした。

デパートに飛び込み、ケーキの予約を済ませ、オードブルのチェックを済ませる。そのままの勢いでおもちゃ売り場に駆け込み、クリスマスツリーを見て回った。

「・・・これがいいかな？」

私は一つのツリーに目を奪われた。大きさは2メートル位で、綺麗に飾りつけされている。

「あ、すみません。このツリー、販売していますか？」

「ええ。していますよ」

「購入した場合、家まで届けてもらうことはお願いできますか？」

「ええ、お任せ下さい」

「それじゃあ・・・？」

（そう言えば、私住所知らない。聞こうにも電話番号も知らない。そもそも、電話なんてあるのかしら？）

「すみません、また来ますね」

私はそそくさとその場を立ち去った。

私は自分の居る場所のことを何も知らない。住所も知らない。電話番号も知らない。それどころか・・・本当の名前も知らない。

真理が歳を取り、学校に通うようになったらどうする？戸籍はどうなっている？Kの存在は、社会的にどうなる？

普通では有り得ない、不思議な境遇を思い知った私はすっかり勢いを失くし、落ち着いた素振りで夕飯の買い物を買った。



デパートから出ると、すっかり夜になっていた。風がより冷たく感じる。買い物を済ませた人を待ち伏せするようにタクシーが連なっているが、私には見ることもしか出来ない。

「乗りますか？」

突然タクシーのドアが開き、声を掛けられた。

「いえ……」

「寒いけど、大丈夫？」

「私……住所知らないんです」

「……へ？」

心配、と言うよりは、不審な目で運転席から私を覗き込んできた。「だから……次はお願いします」

私はムツとしながらとっさにそう答えた。運転手は前に向き直り、ドアを閉めた。ボタンという音を合図に、私はコツコツと靴を鳴らしながら、家に向かって歩き出した。

（知らなければ、知ればいい。ただそれだけのこと。これからのことだって、きつとどうにかなるし、どうにかできるだろう）

あまり持ったことのない反骨心が私の中に芽生えた。それだけ……  
・ 大事なものだということ。

（絶対に、壊させはしない。私が2人を守ってあげる）

私は立ち止まり、月のない夜空を見上げ、自分に誓った。

「……雪？」

建物の淡い光に照らされた空に、ふわりふわりと結晶が舞い降り始めた。私は目を細め、ほんのりと照らされた雪を追った。雪は徐々に大地へと近づく。その最中で、落日を過ぎたにも拘らず、遠くの空がオレンジ色に染まっているのに気が付いた。

見覚えのある光は、次第に私の恐怖心を露にしていくな。

「この光……方角……！」

全身を蝕む胸騒ぎを振り払うように、私は駆け出した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0874t/>

---

聖者の灰

2011年5月14日19時56分発行